K-555

米沢市埋蔵文化財調査報告書　第61集

遺跡詳細分布調査報告書
第 11 集

住宅開発関係の分布調査
大規模開発関係の分布調査
李代遺跡の発掘調査
大樽遺跡の発掘調査
大塚山遺跡の発掘調査
木和田古墳の発掘調査

平成10年3月
1998
米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書　第61集

遺跡詳細分布調査報告書
第 11 集

住宅開発関係の分布調査
大規模開発関係の分布調査
杢代遺跡の発掘調査
大樽遺跡の発掘調査
大塚山遺跡の発掘調査
木和田古墳の発掘調査

平成10年3月
1998
米沢市教育委員会

序　　文

本報告書は、米沢市教育委員会が平成９年度に、文化庁の補助を受けて実施した、「遺跡詳細分布調査」の結果をまとめたものです。

本市教育委員会は、埋蔵文化財保護の周知徹底を図るために、遺跡詳細分布調査を昭和62年から本年度まで11年間継続して実施しております。調査を重ねることにより、埋蔵文化財の所在、範囲及び性格などの解明がなされてまいりました。

この度の遺跡詳細分布調査では、開発行為に係る緊急発掘調査を４件実施いたしました。これらの遺跡は、杢代遺跡（縄文時代晩期、弥生時代）・大塚山遺跡（縄文時代前期初頭、中期）・大樽遺跡（縄文時代早期～晩期、中世期）などがあります。

また、近年、大規模な開発事業が年々増加傾向にありますが、本市に関しましても郊外における大型店舗の進出や宅地開発がめざましい状況であります。これらの開発に伴う調査も、開発事業者のご理解を得て３件実施いたしております。

本市教育委員会は、埋蔵文化財保護の立場から開発事業者と調整を円滑に行うため、本調査事業には可能な限り力を注いでおります。

最後になりましたが、調査にあたって数多くのご指導、ご協力を賜りました文化庁、県文化財課をはじめ地権者各位、地元の皆様に対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成10年３月30日

米沢市教育委員会

教育長　相田　實

例　　言

1　本報告書は、文化庁の国庫補助を得て実施した、平成９年度の埋蔵文化財調査報告書第61集（遺跡群細分布調査報告書第11集）である。

2　調査は米沢市教育委員会が実施したものである。

3　調査体制は下記のとおりである。

調査主体　米沢市教育委員会
調査総括　舟山豊弘（文化課長）
調査担当　手塚　孝
調査主任　菊地政信　月山隆弘
作業員　穴沢茂雄　栗野真也　五十嵐三郎　井上吉栄　今泉聡子
遠藤貴治　菊地芳子　黒沢栄美子　黒沢富雄　小関秀美子
近野慶子　斎藤文太郎　斎藤光子　佐藤四郎　佐藤高義
島貫ゆき　下村映子　高橋洋三　武田房次郎　田中みつ
田村和男　中島国雄　西野雄二　松本三郎　渡部和三
事務局長　小林伸一
事務局　山本　卯　平間洋子
調査指導　文化庁　山形県教育庁文化財課

4　挿図の縮尺は、第１節は2,500分の1、5,000分の1、10,000分の1、20,000分の1で示し、第２～５節に関しては各挿図にスケールで示した。挿図内の図化及び記号は、黒丸部分が出土地点・ＴＹ－柱穴・ＤＹ－土壙・ＫＹ－溝跡・ＰＹ－ピット、ＡＺ－土器、ＢＺ－石器を示している。挿図番号と写真図版番号は同一であり、写真図版の縮尺は適宜行っている。

5　各遺跡の出土遺物は、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山200番）に一括保管している。

6　本代遺跡の出土遺物に関しては財山形県埋文センター第一課長の佐藤庄一氏の御教示をいただいた。また木和田古墳の調査に際しては、県立風土記丘館長の川崎利夫氏から御助言を賜わった。

7　木和田古墳の発見の経緯については、上郷地区在住の平間重光氏、置賜考古学会会長の橋爪　建氏から御教示をいただいた。

8　調査にあたって、佐藤和子・峯松武司・高山三郎・斎藤文太郎の各氏及び関係各位の協力を得た。記して感謝申し上げます。

9　本書の編集及び作成は、第１・２・５節が月山　隆弘、第３・４・６節が菊地政信、全体については手塚　孝が総括した。

本 文 目 次

序 文　例 言
第１節　住宅開発等に伴う埋蔵文化財調査経過
　Ⅰ　住宅開発に伴う遺跡の確認 …… 1

第２節　大規模開発の試掘調査結果 …… 4
　Ⅰ　試掘調査状況 …… 5

第３節　杢代遺跡
　Ⅰ　遺跡の概要 …… 21
　Ⅱ　調査の経過 …… 21
　Ⅲ　検出遺構 …… 23
　Ⅳ　出土遺物 …… 23
　Ⅴ　ま と め …… 25

第４節　大樽遺跡
　Ⅰ　遺跡の概要 …… 39
　Ⅱ　調査の経過 …… 39
　Ⅲ　検出遺構 …… 41
　Ⅳ　出土遺物 …… 44
　Ⅴ　ま と め …… 45

第５節　大塚山遺跡
　Ⅰ　遺跡の概要 …… 51
　Ⅱ　調査の経過 …… 51
　Ⅲ　検出遺構 …… 53
　Ⅳ　出土遺物 …… 59
　Ⅴ　ま と め …… 59

第６節　木和田古墳
　Ⅰ　古墳の概要 …… 62
　Ⅱ　調査の経過 …… 62
　Ⅲ　古墳の形態 …… 65
　Ⅳ　主体部の形状 …… 65
　Ⅴ　出土遺物 …… 66
　Ⅵ　ま と め …… 70
　参考文献 …… 70

挿　図　目　次

第１図　東屋敷・野際遺跡位置図 …… 5
第２図　舘山矢子町調査区位置図 …… 5
第３図　六郷町調査区位置図 …… 6
第４図　広幡町調査区位置図 …… 6
第５図　赤坊調査区位置図 …… 7
第６図　牛森山南下遺跡位置図 …… 7
第７図　万世町調査区位置図 …… 8
第８図　篠田町調査区位置図 …… 8
第９図　三沢調査区位置図 …… 9
第10図　上谷地Ｃ遺跡位置図 …… 9
第11図　古志田町調査区位置図 …… 10
第12図　成島調査区位置図 …… 10
第13図　杉の目調査区位置図 …… 11
第14図　成島調査区位置図 …… 11
第15図　東２丁目調査区位置図 …… 12
第16図　万世町調査区位置図 …… 12
第17図　塩井町調査区位置図 …… 13
第18図　大浦Ｄ遺跡位置図 …… 13
第19図　徳町調査区位置図 …… 14
第20図　広幡町調査区位置図 …… 14
第21図　林泉寺調査区位置図 …… 15
第22図　太田町・芳泉町調査区位置図 …… 15
第23図　通町調査区位置図 …… 16
第24図　舘山調査区位置図 …… 16
第25図　関調査区位置図 …… 17
第26図　広幡町調査区位置図 …… 17
第27図　金池調査区位置図 …… 18
第28図　遠山調査区位置図 …… 18
第29図　李山調査区位置図 …… 19
第30図　東大通調査区位置図 …… 19
第31図　吹屋敷調査区位置図 …… 20
第32図　竹井調査区位置図 …… 20
第33図　杢代遺跡位置図 …… 22
第34図　杢代遺跡遺構全体図 …… 26
第35図　杢代遺跡出土土器実測図(1) …… 27
第36図　杢代遺跡出土土器実測図(2) …… 28
第37図　杢代遺跡出土土器実測図(3) …… 29
第38図　杢代遺跡出土土器実測図(4) …… 30
第39図　杢代遺跡出土土器実測図(5) …… 31
第40図　杢代遺跡出土土器拓影図(1) …… 32
第41図　杢代遺跡出土土器拓影図(2) …… 33
第42図　杢代遺跡出土土器拓影図(3) …… 34
第43図　杢代遺跡出土土器拓影図(4) …… 35
第44図　杢代遺跡出土石器実測図(1) …… 36
第45図　杢代遺跡出土石器実測図(2) …… 37
第46図　杢代遺跡出土石器実測図(3) …… 38
第47図　大溝遺跡位置図 …… 40
第48図　大溝遺跡遺構全体図 …… 42
第49図　大溝遺跡遺構平面図(1) …… 43
第50図　大溝遺跡遺構平面図(2) …… 46
第51図　大溝遺跡遺構平面図(3) …… 47
第52図　大溝遺跡出土土器拓影図(1) …… 48
第53図　大溝遺跡出土土器拓影図(2) …… 49
第54図　大溝遺跡出土遺物実測図(1) …… 50
第55図　大塚山遺跡位置図 …… 52
第56図　大塚山遺跡遺構全体図 …… 54
第57図　大塚山遺跡土壌平面図(1) …… 56
第58図　大塚山遺跡土壌平面図(2) …… 57
第59図　大塚山遺跡土壌平面図(3) …… 58
第60図　大塚山遺跡出土土器拓影図 …… 60
第61図　大塚山遺跡出土石器実測図 …… 61
第62図　木和田古墳位置図 …… 63
第63図　木和田古墳現況測量図 …… 64
第64図　木和田古墳玄室平面図 …… 67
第65図　木和田古墳トレンチ配置図 …… 68
第66図　木和田古墳出土遺物実測図 …… 69

付　表　目　次

表－１　個人開発の試掘状況 …… 2
表－２　大規模開発試掘状況 …… 3
表－３　大規模開発試掘状況 …… 4
表－４　米沢盆地の主要横穴式古墳一覧 …… 71

図 版 目 次

第 一 図版　杢代遺跡の発掘（1）　Ⅱ層面礫出土状況，調査風景
第 二 図版　杢代遺跡の発掘（2）　Ⅲ層面ＡＺ24出土状況，最下層ＡＺ54出土状況
第 三 図版　杢代遺跡の発掘（3）　北東壁セクション状況，調査区全景
第 四 図版　杢代遺跡出土の土器（1）
第 五 図版　杢代遺跡出土の土器（2）
第 六 図版　杢代遺跡出土の土器（3）
第 七 図版　杢代遺跡出土の土器（4）
第 八 図版　杢代遺跡出土の土器（5）
第 九 図版　杢代遺跡出土の土器（6）
第 十 図版　杢代遺跡出土の土器（7）
第 十一 図版　杢代遺跡出土の土器（8）
第 十二 図版　杢代遺跡出土の土器（9）
第 十三 図版　杢代遺跡出土の土器（10）
第 十四 図版　杢代遺跡出土の土器（11）
第 十五 図版　杢代遺跡出土の土器（12）
第 十六 図版　杢代遺跡出土の土器（13）
第 十七 図版　杢代遺跡出土の石器（1）
第 十八 図版　大樽遺跡の発掘（1）　井戸跡全景，調査区全景
第 十九 図版　大樽遺跡の発掘（2）　ＳＹ１半裁状況，流し場跡近景
第 二十 図版　大樽遺跡の発掘（3）　ＴＹ７半裁状況，ＴＹ８半裁状況
第二十一図版　大樽遺跡出土の土器（1）
第二十二図版　大樽遺跡出土の土器（2）
第二十三図版　大樽遺跡出土の土器（3）
第二十四図版　大樽遺跡出土の石器，木和田古墳出土の須恵器
第二十五図版　大塚山遺跡の発掘（1）　調査区全景
第二十六図版　大塚山遺跡の発掘（2）　落ち込み箇所セクション状況，ＤＹ　セクション状況
第二十七図版　大塚山遺跡の発掘（3）　ＤＹ３完掘状況，ＤＹ７半裁状況
第二十八図版　大塚山遺跡出土の土器（1）
第二十九図版　大塚山遺跡出土の石器（2）
第 三十 図版　木和田古墳の発掘（1）　遺跡遠景，古墳全景
第三十一図版　木和田古墳の発掘（2）　東方側壁近景，奥壁近景
第三十二図版　木和田古墳の発掘（3）　前庭部調査全景，玄間近景
第三十三図版　木和田古墳の発掘（4）　Ｔ６裏ごめ石出土状況，Ｔ６墳丘下端の確認状況
第三十四図版　木和田古墳出土の遺物（1）

第１節　住宅開発等に伴う埋蔵文化財調査経過

Ⅰ　住宅開発等に伴う遺跡の確認

今年度、本市教育委員会に住宅開発などによって、埋蔵文化財に係りがあると判断されるため、協議や試掘などの確認依頼を受けたものは12月26日現在で105件であった。

昨年までの確認及び調査依頼の報告は３月20日で締切り記載していたが、報告書の刊行日が遅滞することから、今年度に限り12月末日までで調査依頼を掲載することにした。平成10年度の１月から３月までの調査依頼については、平成10年に掲載することとし、今後の調査依頼については１月から12月の期間とする。今年度の内訳は下記のとおりである。

１　住宅建設に係るもの	47件	５　砂利採集などに係るもの	７件
２　店舗などに係るもの	６件	６　公共施設・工事に係るもの	４件
３　工場・倉庫などに係るもの	３件	７　その他の開発に係るもの	27件
４　土地開発に係るもの	11件		

以上のように、今年度の調査依頼の種類は例年と同様、住宅建設に係るものが多くを占めている。今年度の試掘調査の特徴として、例年は個人の宅地造成に伴うものが多いが、それにつけ加え、包蔵地外からの宅地造成等の大規模開発に伴う試掘調査依頼が増加がしている。また、全体の数は例年より若干多い傾向にある。

今年度の105件の確認申請及び確認依頼の調査内容を区分けすると、遺跡地図で確認したのみのもの（包蔵地外）23件、現地踏査２件、現地立会い調査４件、試掘調査（トレンチ・グリット）76件であった。

今回の遺跡詳細分布調査によって、遺構や遺物が確認されたため発掘調査に至ったのは８件である。緊急発掘調査を実施した遺跡には、縄文後期～弥生時代の杢代遺跡（万世町）、縄文早期～晩期の大塚山遺跡（諸仏町）、縄文時代中期～後期の大樽遺跡（舘山）の３箇所であった。これらの３遺跡はすべて個人の住宅に係るものである。また今後、開発が予想されることから発掘調査を実施した。木和田古墳（大字木和田）のこれらの調査内容については、後の第３～６節で説明する。

また分布調査によって、遺構や遺物が確認されたため、緊急発掘調査を実施した遺跡には舘山の大樽遺跡（縄文時代）２件、中田町大浦Ｃ遺跡（奈良・平安・中世期）があるが、原因者と市の負担によって実施したことから今回の調査報告書から除外した。平成10年度に報告書年て刊行する予定である。

以下、遺跡包蔵地内で試掘調査を実施した箇所については表１・２にまとめた。遺跡包蔵地及び包蔵地外での、大規模開発に係る試掘調査を実施した箇所については表３にまとめ順次、位置図に調査箇所を加えその結果について概述する。大規模開発については、1,000㎡以上としている。

平成９年度　試掘調査箇所

表－１

No.	遺跡名	調　査　箇　所	調査月日	開発の種別	調査方法	備　　考
1	大　壇	大字笹野字大壇参1319-8	４月２日	資材置場	グリット	２×２m　２箇所
2	大下屋敷北端	窪田町矢野目字大下屋敷2285	４月７日	住　宅	グリット	１×２m　２箇所
3	春日町	春日１丁目7-46	４月14日	住　宅	トレンチ	２×４m　２本
4	米沢城	松が岬２丁目4730-5	４月17日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
5	大塚山	諸仏町3724	５月１日	物　置	トレンチ	１×４m　２本
6	台　坂	花沢町1286-1	５月７日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
7	上新田Ｃ	上新田字田尻457他	５月26日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
8	米沢城	門東町２丁目3029-3	５月29日	事務所	グリット	４×４m　２箇所
9	元　立	大字川井字元立2044	５月29日	住　宅	グリット	２×２m　２箇所
10	元　立	大字川井字元立2023	６月６日	農　舎	グリット	１×２m　２箇所
11	東大通一丁目	東大通１丁目17079-1他	６月６日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
12	台　坂	花沢町１丁目1502-5	６月10日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
13	大塚山	諸仏町3572-1他	６月10日	盛土整地	トレンチ	２×30m　２本
14	米沢城	松が岬２丁目4858他	６月17日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
15	米沢城	松が岬２丁目4858他	６月30日	住　宅	グリット	１×２m　２箇所
16	米沢城	松が岬１丁目1-5	７月３日	住　宅	グリット	１×１m　２箇所
17	上　野	大字川井2158	７月８日	車　庫	トレンチ	１×４m　２本
18	上　野	大字川井3699	７月10日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
19	花沢Ａ	花沢町１丁目2492	７月14日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
20	上　野	大字川井道下3716他	７月16日	住　宅	トレンチ	１×４m　１本
21	大　樽	舘山４丁目6500-1	７月23日	車　庫	トレンチ	１×４m　２本
22	白　旗	大字三沢字白旗26110-2	８月１日	宅地造成	トレンチ	２×40m　２本
23	台　坂	下花沢２丁目1852-8	８月５日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
24	馳上ｂ	大字川井字元立979-2	８月６日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
25	坊　中	大字関根14570	８月22日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本

平成９年度　試掘調査箇所

表－２

No.	遺跡名	調　査　箇　所	調査月日	開発の種別	調査方法	備　　考
26	元　立	大字川井字元立1920他	８月25日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
27	下花沢ｂ	東大通３丁目7651-7他	８月26日	店　舗	トレンチ	１×４m　１本
28	野　際	大字川井字元立775-5他	８月28日	倉　庫	トレンチ	２×70m他２本
29	台　坂	下花沢３丁目1810-1他	８月28日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
30	花沢Ａ	花沢１丁目1530	８月29日	住　宅	トレンチ	１×４m　１本
31	花沢Ａ	花沢１丁目1337-1他	９月３日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
32	春日町	春日１丁目3757他	10月３日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
33	米沢城	丸の内１丁目4749-10	10月７日	住　宅	グリット	２×３m　２箇所
34	東屋敷	大字川井1160	10月16日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
35	花沢Ａ	花沢町１丁目2596-2他	10月21日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
36	舘山Ｃ	舘山６丁目6551-5	10月21日	住　宅	トレンチ	１×４m　４本
37	馳上ｂ	大字川井字元立994他	10月21日	宅地造成	グリット	１×１m　４箇所
38	中の目	大字梓川字上竹井1124-1他	10月24日	住　宅	トレンチ	１×80m　１本
39	台　坂	下花沢２丁目1894-1	11月４日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
40	米沢城	城南１丁目113	11月12日	車　庫	トレンチ	１×４m　４本
41	米沢城	丸の内１丁目35-12	10月20日	植　栽	グリット	３×３m　２箇所
42	一本橋Ｃ	笹野本町64-3	11月20日	倉　庫	グリット	１×２m　２箇所
43	台ノ上	吾妻町6-36	12月３日	車　庫	トレンチ	１×４m　２本
44	舘山平城	舘山１丁目6368	12月11日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
45	舘山平城	舘山１丁目95	12月12日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
46	普門院館	大字関根13926-8	12月15日	公衆便所	トレンチ	２×５m　１本
47	大清Ｃ	中田町505-1	12月８日	共同住宅	トレンチ	２×５m　１本
48	米沢城	門東町１丁目5-20	12月17日	住　宅	トレンチ	１×４m　２本
49	米沢城	城南１丁目50-2他	12月18日	住　宅	グリット	１×２m　２箇所
50	米沢城	城南１丁目9-19	12月19日	共同住宅	グリット	１×２m　２箇所

平成９年度　試掘調査箇所（大規模開発）

表－３

No.	遺跡名	調　査　箇　所	調査月日	開発の種別	調査方法	備　　考
1	東屋敷・野際	大字東屋敷・同野際	4月7日他	中学校建設	トレンチ	2×70m他34本
2	該当なし	舘山矢子町字早坂山2253-1	4月10日	岩石採取	グリット	1×1m　15箇所
3	該当なし	六郷町一漆字中225番地	4月11日	砂利採取	トレンチ	2×10m　2本
4	該当なし	広幡町小山田地内	4月21日	砂利採取	トレンチ	2×30m　1本
5	該当なし	大字赤崩字漆原地内	5月1日	砂利採取	現地踏査	
6	牛森山南下	万世町牛森地内	5月7日	宅地造成	トレンチ	2×70m他4本
7	該当なし	万世町桑山843他	5月9日	倉庫用地造成	グリット	1×1m　12箇所
8	該当なし	窪田町窪田地内	5月9日	宅地造成	グリット	1×1m　3箇所
9	該当なし	大字三沢字白旗17-2	5月9日	工場用地造成	グリット	1×1m　3箇所
10	上谷地C	大字川井地内	5月27日他	下水道事業	トレンチ	1×300m　1本
11	該当なし	古志田町地内	6月11日	宅地造成	トレンチ	2×100m他2本
12	該当なし	成島２丁目地内	8月5日	宅地造成	トレンチ	2×50m他2本
13	該当なし	杉の目字反町二地内	8月26日	宅地造成	トレンチ	2×50m他2本
14	該当なし	成島町2丁目2940-1他	8月26日	事務所造成	グリット	1×1m　12箇所
15	該当なし	東２丁目地内	9月25日	店舗造成	グリット	1×1m　10箇所
16	該当なし	万世町梓山2062	9月25日	水道施設	グリット	1×1m　5箇所
17	該当なし	塩井町塩野字北浦四	9月30日	店舗新築	トレンチ	2×80m　2本
18	大　浦　D	中田町地内	9月30日	宅地造成	トレンチ	2×30m　4本
19	該当なし	徳町105番2他	10月15日	店舗新築	トレンチ	1×60m　2本
20	該当なし	広幡町地内	10月7日	砂利採取	トレンチ	2×30m　2本
21	該当なし	林泉寺町２丁目2264-1他	10月17日	店舗造成	グリット	1×1m　8箇所
22	該当なし	太田町5丁目 芳泉町地内	10月22日	宅地造成	トレンチ	2×10m　2本
23	該当なし	通町１丁目地内	10月31日	宅地造成	トレンチ	2×10m　5本
24	該当なし	舘山２丁目6409-2他	10月31日	駐 車 場	トレンチ	2×10m　1本
25	該当なし	大字関字蛇ノ沢3913-1他	11月4日	岩石採取	地図確認	
26	該当なし	広幡町成島７他	11月13日	宅地造成	トレンチ	1×10m他3本
27	該当なし	金池５丁目8-11他	11月19日	店舗新築	地図確認	
28	該当なし	遠山地内	11月28日	道路改良	トレンチ	1×5m　2本
29	該当なし	李山字諏訪道下地内	12月3日	砂利採取	トレンチ	2×10m　2本
30	該当なし	東大通１丁目1-126他	12月16日	宅地造成	トレンチ	1×40m　3本
31	該当なし	吹屋敷地内	12月22日	宅地造成	トレンチ	2×50m他8本
32	該当なし	大字竹井字野際地内	12月26日	無線基地局設置	現地踏査	

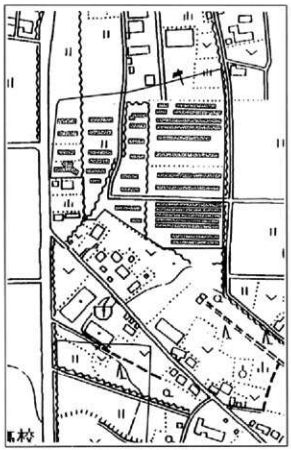
Ⅰ　試掘調査状況

1　東屋敷・野際遺跡

両遺跡は、市街地の北東約４kmに位置し、標高242～245mを測る。大字東屋敷、同竹井中の目地内に所在する。遺跡付近は、商工業団地や新設中学校の建設が進められており、宅地化が急速に進んでいる所である。

調査は、中学校の新設に伴うものであり、現況は水田になっている。

開発予定地に、重機によって２m×70m他34本のトレンチを設定し調査した結果、表土下40～50cmで、暗褐色の地山層であったが遺構・遺物は確認されなかった。遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断したが、念のため慎重工事を指示した。



第１図　東屋敷・野際遺跡位置図

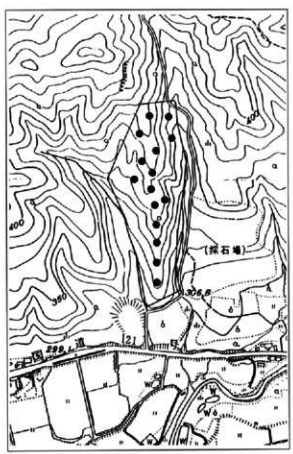
2　舘山矢子町調査区

開発予定地は、市街地から西方約４kmに位置し、標高307～400mを測る。舘山矢子町字早坂地内に所在する。

当該地の北側200mには、矢子山城跡が存在しており、平成５年度に発掘調査を実施している所に隣接する。当該地周辺は、最近になって砂利採取が盛んに進められている場所である。

調査は、岩石採取に伴うものであり、現況は山林になっている。

開発予定地は急斜面になっている所があるため、手掘りにより１m×１mのグリットを15箇所設定し調査した結果、現状は、表土下20～30cmで、黄褐色粘土の地山層に到達したが、遺構・遺物は確認されなかった。よって、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。



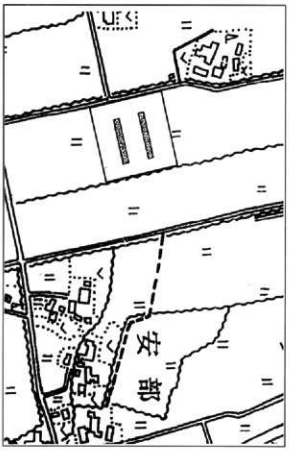
第２図　舘山矢子町調査区位置図

3　六郷町調査区

開発予定地は、市街地から北西約５kmに位置し、標高 223mを測る。六郷町一漆字中地内に所在する。

調査は、砂利採取に伴うものであり、現況は休耕田になっている。近年、当該地付近は砂利採取が頻繁に行われている所である。

開発予定地に、重機により２m×10mのトレンチを２本設定し調査した結果、表土下直ぐの30cm前後で砂利層にあたった。念のため約２mほど掘り下げを試みたが砂利層であることや、付近の試掘調査結果から、当該地は鬼面川の河川跡と推測される。また、遺構・遺物の形跡も確認されなかったことから。遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。



第３図　六郷町調査区位置図

4　広幡町調査区

開発予定地は、市街地から北西約４kmに位置し、標高 245mを測る。広幡町小山田地内に所在する。

調査は、砂利採取に伴うものであり、現況は水田になっている。当該地付近は、砂利採取が多く行われている所である。

念のため開発予定地の中央部に、東西方向に２m×30mのトレンチを１本設定し調査した結果、表土下約40cmが暗青灰色粘土質シルトの地山層であった。また、表土下約80cm以下が砂利層であることや、付近の試掘調査結果から、当該地は鬼面川の氾濫原と推測される。なお、遺構・遺物は確認されなかったため、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。

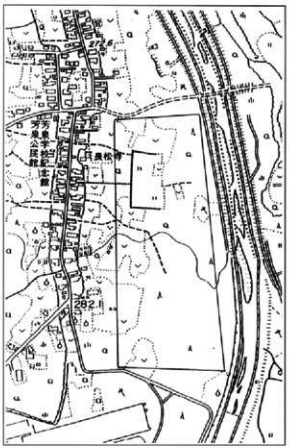
第４図　広幡町調査区位置図

5　赤崩調査区

開発予定地は、市街地から南東約４kmに位置し、標高283mを測る。大字赤崩字漆原地内に所在する。当該地の南東側には、治水事業を施工した護岸遺構の谷地河原堤防（通称、直江石堤）が隣接している所である。この石堤は市指定史跡に登録されている。

調査は、砂利採取に伴うものであり、現況は畑地・果樹園になっている。

開発予定地は、旧河川跡と考えられることから現地踏査によって調査を実施したが、遺物などは確認できなかった。また付近の試掘調査では、表土下60～80cm以下が砂利層であることから、当該地付近は最上川の旧河川跡と推測される。遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。



第５図　赤崩調査区位置図

6　牛森山南下遺跡

開発予定地は、市街地から東方約５kmに位置し、標高266mを測る。万世町牛森地内に所在し、東側で若干遺跡範囲内にかかる。

当該地付近には、縄文時代から平安時代までの集落跡や中世期の館跡など、遺跡が数多く存在する地域である。

調査は、宅地造成事業に伴うものであり、現況は水田・畑地になっている。

開発予定地に、２m×70m他４本のトレンチを設定し調査した結果、東側から西側にしたがって緩やかに低くなっていた。地山層までは40～60cmあり、３層が安定した黄褐色シルトであった。しかし、今回のトレンチ調査では遺構・遺物は確認されなかった。よって、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。

第６図　牛森山南下遺跡位置図

7　万世町調査区

開発予定地は、市街地の東方約３kmの梓川扇状地の末端部に位置し、標高266mを測る。万世町桑山地内に所在する。

北側以北500mには、桑山遺跡群が接近している所で、直ぐ南側には国道13号線が東西に走っており、交通の要所である。

調査は、倉庫用地造成に伴うものであり、現況は休耕田になっている。

開発予定地に、１m×１mのグリットを12箇所設定し調査した結果、地山層までは南側で約30cm、北側では約40cmあり、緩やかに北側に傾斜していた。３層が安定した黄褐色シルトであった。遺構・遺物などは確認されなかった。よって、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。

第７図　万世町調査区位置図

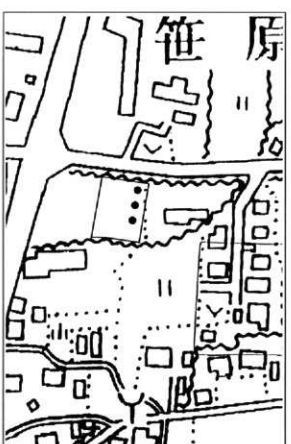
8　窪田町調査区

開発予定地は、市街地の北方約５kmに位置し、松川によって形成された河岸段丘上の標高228mに立地する。窪田町窪田地内に所在する。

当該地の南東側100mには中世の中屋敷舘跡、東側には500mに、奈良時代の郷衙跡と推定される笹原遺跡が存在する。

調査は、宅地造成事業に伴い、約1,000㎡を対象とするものであり、現況は旧水田に盛土をしている整地層になっている。

開発予定地には約１mほど盛土をしていることから、１m×１mのグリットを３箇所のみ設定し調査した結果、地山層までは約40cmあり、３層が安定した黄褐色シルトであった。しかし、遺構・遺物などは確認されなかった。よって、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。



第８図　窪田町調査区位置図

9　三沢調査区

開発予定地は、市街地の南東約４kmに位置し、松川の河岸段丘上の標高282mを測る。大字三沢字白旗に所在する。

当該地の東側500mには、縄文時代前期の松原遺跡、また西側300mには同時期の下原ａ遺跡が隣接し、両遺跡の中間にあたる。

調査は、工場用地造成に伴うものであり、現況は宅地になっている。

開発予定地は整地層になっていることから、当該地に１m×１mのグリットを３箇所設定し調査した結果、表土下20～30cmあり、２層が黄褐色シルトの地山層であった。遺構・遺物などは検出されなかったことから、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。

第９図　三沢調査区位置図

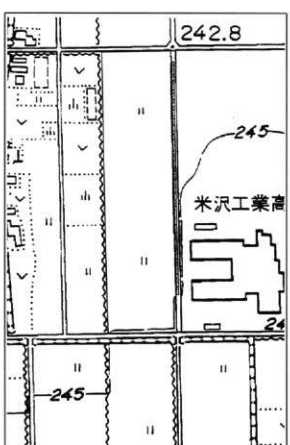
10　上谷地Ｃ遺跡

本遺跡は、市街地の北東約４kmに位置し、標高243mを測る。大字川井地内に所在する。

遺跡付近は、商工業団地や新設中学校の建設などが進められており、徐々に宅地化が進んでいる所である。

調査は、公共下水道事業伴うもので、現況は農道になっている。

開発予定地内は、幅２m×300mの範囲であることから、１m×300mのトレンチ１本を設定し調査した。地山層までは60～80cmあり、４層が茶褐色粘土シルトであった。今回の調査では、中世期の遺物（陶器片）が数点と近世の溝跡が数本確認されたが、奈良時代の遺構や遺物は検出されなかったため、遺跡の存在する可能性は少なく、開発には支障ないものと判断し、念のため慎重工事を指示した。



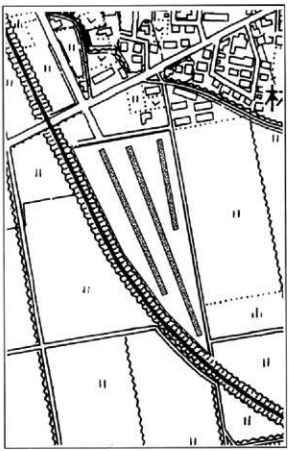
第10図　上谷地Ｃ遺跡位置図

11　古志田町調査区

開発予定地は、市街地の南西約２㎞に位置し、標高256mを測る。古志田町地内に所在する。当該地付近は、道路の新設やスーパーマーケットなどの進出によって、宅地化が進んでいる所である。

調査は、宅地造成に伴うもので、現況は休耕田になっている。

開発予定地に２m×100m他２本のトレンチを設定し調査した結果、地山層までは25～40cmあり、南側から北側にかけて緩やかに傾斜しており、３層が地山層であった。南側で黄褐色粘土質シルト、北側で青褐色シルト（一部有機物を含む泥炭層）であった。遺構・遺物などは確認されなかった。よって、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。



第11図　古志田町調査区位置図

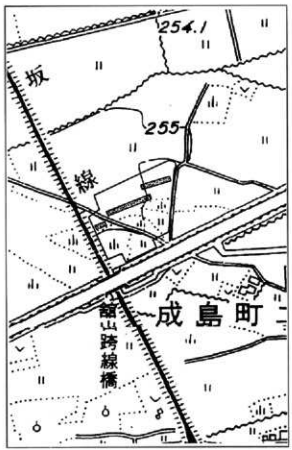
12　成島二丁目調査区

開発予定地は、市街地の西方約２㎞に位置し、鬼面川により形成された河岸段丘の標高255mを測る。成島２丁目地内に所在する。

当該地付近は国道121号線（通称六部・舘山線）新設後、大型店舗や住宅団地の建設など急伸展著しい地区である。

調査は、宅地造成事業に伴うものであり、現況は水田・畑地になっている。

開発予定地に２m×50m他２本のトレンチを設定し、調査した結果、地山層までは30～50cmあり、南西側から北東側にかけて緩やかに傾斜しており、３層が黄褐色シルトであった。遺構・遺物などは確認されなかった。よって、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。



第12図　成島調査区位置図

13　杉の目調査区

開発予定地は、市街地から南方約２㎞に位置し、標高268mを測る。杉の目字反町二地内に所在する。

当該地の南東側400mには,縄文時代の大壇・大塚山遺跡等が隣接する所である。

調査は、宅地造成事業に伴うものであり、現況は原野になっている。

開発予定地に２m×50m他２本のトレンチを設定し調査した結果、地山層までは30～50cmあり、２～３層に分かれていた。全域的に暗褐色粘土（一部泥炭層含）であった。遺構・遺物の存在は確認されなかった。よって、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断したが、念のため慎重工事を指示した。

第13図　杉の目調査区位置図

14　成島２丁目調査区

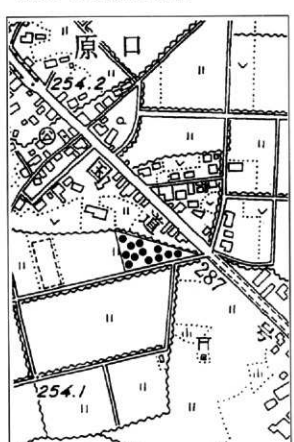
開発予定地は、市街地の西方約２㎞に位置し、鬼面川によって形成された河岸段丘の標高255mを測る。成島町２丁目地内に所在する。

当該地付近は国道121号線新設後、大型店舗や住宅団地の建設などで宅地化が急激に進んでいる所である。

調査は、社屋敷地拡張造成に伴うものであり、現況は休耕田になっている。

開発予定地に１m×１mのグリットを12箇所設定し調査した結果、表土下約30cmの２層が地山層であり、安定した茶褐色シルト層(礫含）であった。

当該地は西側を流れる鬼面川の氾濫原と判断される。遺跡の痕跡は確認されなかった。よって、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。



第14図　成島調査区位置図

15　東２丁目調査区

開発予定地は、市街地の東方約２kmに位置し、標高256mを測る。東２丁目地内のＪＲ米沢駅南側に所在する。

当該地付近は、商工業地及び住宅地になっており、500m範囲内の北側と南側には、縄文時代の遺跡が多く存在している。

調査は、店舗用地造成に伴うものであり、現況は水田になっている。

開発予定地には稲が作付けされていたことから１m×１mのグリットを10箇所のみ設定し調査した結果、表下約25cmの３層が茶褐色砂質土の地山層であった。しかし、遺構・遺物は確認されなかった。よって、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。

第15図　東２丁目調査区位置図

16　万世町調査区

開発予定地は、市街地から南東約７kmに位置し、標高306mを測る。万世町梓山地内に所在し、北側500mには国道13号線が走る。

当該地付近には縄文時代の遺跡が隣接しており、南側に梓山ａ遺跡、東側には法将寺遺跡、北側には上窪遺跡の各縄文時代（早期から中期）の遺跡があり、また西側には中世期の町在家舘跡が存在する。

調査は、水道施設布設工事に伴うもので、現況は畑地になっている。

開発予定地に１m×１mのグリットを５箇所設定し調査した結果、表土下約40cmの３層が地山層の青灰色砂質土であり、遺構・遺物は確認されなかった。よって、当該地は遺跡の空白地にあたり、遺跡の存在する可能性はなく、開発には支障ないものと判断した。

第16図　万世町調査区位置図

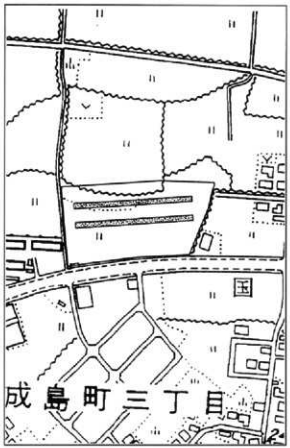
17　塩井町調査区

開発予定地は、市街地から北西約２kmに位置し、標高 247mを測る。塩井町塩野字北浦四地内に所在する。

当該地南には新設の国道121号線が走ることから大型店舗の進出・大規模な宅地開発など伸展がめざましい所である。

調査は、店舗用地造成に伴うもので、現況は休耕田になっている。

開発予定地に２m×80mのトレンチを２本設定し調査した結果、表土下約30cmの３層が茶褐色及び灰褐色シルト質粘土(礫多量混入)の地山層であった。当該地付近には礫が多量混入していることから鬼面川の氾濫原と推定される。遺跡の存在する可能性はないものと判断した。



第17図　塩井町調査区位置図

18　大浦Ｄ遺跡

本遺跡は、市街地の北側約２kmに位置し、標高233mを測る。中田町地内に所在する。

本遺跡の南側には、大浦Ａ～Ｃ遺跡が存在し、大浦遺跡群として広範囲に分布している。

この大浦遺跡群としての発掘調査は、12回実施されており、奈良時代の置賜官がと推定されている遺跡である。本遺跡は中世の遺跡として登録されている。

調査は、宅地造成に伴うものであり、現況は畑地になっている。

開発予定地内に２m×30mのトレンチを４本設定し調査した結果、地山層までは40～60cmあり、３層が茶褐色粘土質シルトであった。

今回の試掘調査では、遺構・遺物は確認されなかった。よって開発には支障ないものと判断される。念のため慎重工事を指示した。

第18図　大浦Ｄ遺跡位置図

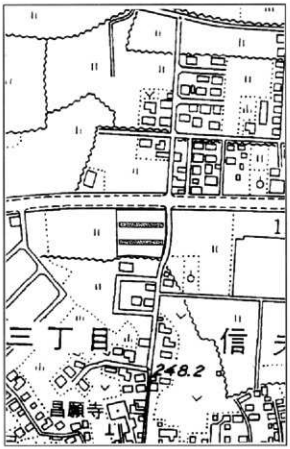
19　徳町調査区位置図

開発予定地は、市街地から北西約２kmに位置し、標高247mを測る。徳町地内に所在する。

当該地の北側には新設の国道121号線が走ることから大型店舗の進出・大規模宅地開発など伸展が著しい所である。

調査は、店舗用地造成に伴うもので、現況は畑地になっている。

開発予定地に１m×60mのトレンチを２本設定し調査した結果、表土下約60cmの３層が茶褐色及び灰褐色シルト質粘土(礫少量混入)の地山層であった。当該地には礫が多量混入していることから鬼面川の氾濫原と推定される。遺構・遺物は確認されなかった。よって、遺跡の存在する可能性はないものと判断し、念のため慎重工事を進めるよう指示した。



第19図　徳町調査区位置図

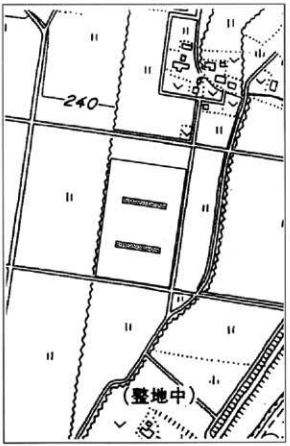
20　広幡町調査区

開発予定地は、市街地から北西約４kmの鬼面川によって形成された河岸段丘上に位置し、標高240mを測る。広幡町小菅地内に所在する。

当概地付近は砂利採取が頻繁に行われている地域であり、縄文時代から古代までの遺跡の存在は薄いが、西側には小菅館在ノ家館ｂなど、中世の館跡が存在することから調査を実施した。

調査は、砂利採取事業に伴うもので、現況は休耕田になっている。

開発予定地に２m×30mのトレンチを２本設定し調査した結果、地山層までは表土下30～40cmあり、３層が茶褐色粘土質シルトであった。遺構・遺物は確認されず、遺跡の存在する可能性はないものと判断した。



第20図　広幡町調査区位置図

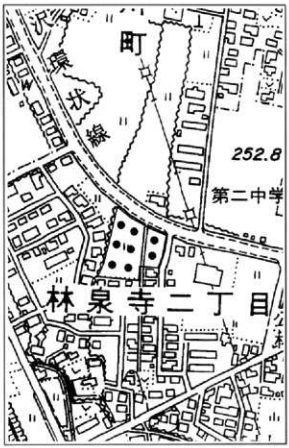
21　林泉寺調査区

開発予定地は、市街地南西約２㎞に位置し、標高253mを測る。林泉寺町２丁目地内に所在する。

当該地付近には、小学校・中学校・大学があり、道路も付近に新設されたことにより、近年になって大規模な宅地開発が進められている所である。

調査は、店舗用地造成に伴うもので、現況は水田になっている。

開発予定地に１ｍ×１ｍのグリットを８箇所設定し調査した結果、地山層までは表土下約30cmあり、３層が黒灰色粘土の地山層であった。しかし、遺構・遺物などは確認されなかった。よって、開発には支障ないものと判断した。



第21図　林泉寺調査区位置図

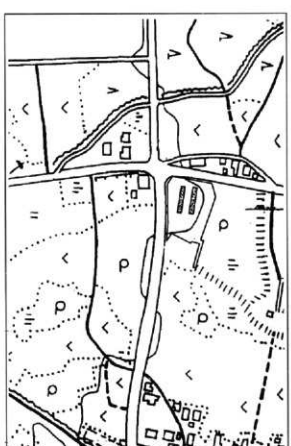
22　太田町・芳泉町調査区

開発予定地は、市街地から南方約３㎞に位置し、標高271mを測る。太田町５丁目、芳泉町に所在する。

当概地付近の東側には中世期の芳泉塚や、西南側には、縄文時代（前期から後期）の大壇Ａ・Ｃなどの遺跡が分布する所である。

調査は、宅地造成に伴うものであり、現況は雑木林になっている。

開発予定地に２ｍ×10mのトレンチを２本設定し調査した結果、地山層までは表土下30～100cmあり、西側から東側にかけて緩やかに傾斜していた。３層が茶褐色シルトに礫が多量に含んでいることから、当該地付近は最上川（松川）の旧河川跡と推測される。なお遺構・遺物などは確認されなかった。よって、開発には支障ないものと判断した。



第22図　太田町・芳泉町調査区位置図

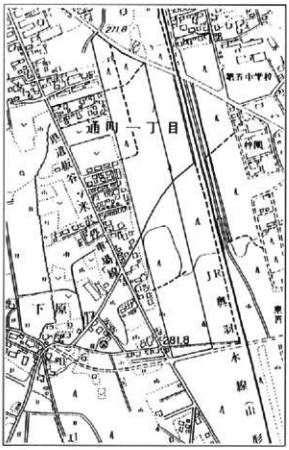
23　通町１丁目調査区

開発予定地は、市街地から南東約４kmに位置し、標高272～282mを測る。通町１丁目地内に所在する。

当該地付近の東側には第五中学校裏遺跡、東大通１丁目遺跡など縄文時代の遺跡が分布している所である。

調査は、宅地造成に伴うものであり、現況は周辺より一段高い微高地の雑木林になっている。すぐ東側にＪＲが走っている。

開発予定地に２m×10mのトレンチを５本設定し調査した結果、表土から地山層までは40～50cmあり、３層が茶褐色シルト（礫多量に含む）の地山層であった。しかし、遺構・遺物などは確認されなかった。よって、開発には支障ないものと判断した。



第23図　通町調査区位置図

24　舘山平城

開発予定地は、市街地の西方約２kmの国道112号線沿いに位置し、標高270mを測る。舘山２丁目地内に所在する。

当城跡は、東西約1.2km、南北約700mの広範囲を包蔵地として指定している。また、当該地の南側には縄文時代（前期初頭）の一ノ坂遺跡や、縄文時代と中世期が複合する生蓮寺遺跡、西側標高310mには舘山城などが存在し、遺跡が密集している所である。

調査は、駐車場造成に伴うものであり、現況は宅地・畑地になっている。

開発予定地に２m×10mのトレンチを１本設定し調査した結果、表土から地山層までは40～60cmあり、３層が安定した茶褐色シルトであった。しかし、遺構・遺物は確認されず、遺跡の存在する可能性はないものと判断した。

第24図　舘山調査区位置図

25　関調査区

開発予定地は、市街地から南方約９kmに位置し、標高510～734mを測る。大字関字蛇ノ沢に所在する。

調査は、岩石採取事業に伴うものであり、現況は山林になっている。

開発予定地を中世城館遺跡調査報告書（山形県教育委員会1995）で照合し確認したところ、遺跡の包蔵地には該当していない。しかし、当該地付近には山城などが分布している可能性があることから、現地踏査を実施した。その結果、南側のなだらかな斜面には平場などが確認されているが、曲輪・堀切りなど山城跡の形跡は確認されなかった。よって、開発には支障ないものと判断した。念のため慎重工事を指示した。

第25図　関調査区位置図

26　広幡町調査区

開発予定地は、市街地から北西約３kmの鬼面川河岸段丘上に位置し、標高251mを測る。広幡町成島に所在する。

当該地の西方にある丘陵上には、成島・窪平遺跡（縄文時代早期から中期）や、中世期の成島館が、また、平地の直ぐ北側には三ケ月在家館、三月在家館など、館跡が多く分布している所である。

調査は、宅地造成に伴うものであり、現況は畑地になっている。

開発予定地に１m×10m他３本のトレンチを設定し調査した結果、地山層までは表土下50cmあり、３層が青灰色シルト（礫含）の地山層であったことから当該地は鬼面川の旧河川跡と判断される。よって、開発には支障ないものと判断した。

第26図　広幡町調査区位置図

27　金池調査区

開発予定地は、市街中心部北側に位置し、標高236mを測る。金池５丁目に所在する。

当該地付近は、官公署が移転してきたことに伴い、商業中心地として近年特に発展している所である。

調査は、店舗用地造成に伴うもので、現況は畑地になっている。

開発予定地付近の土層は、表土下50cm前後で泥炭層になっているところが多い。当該地の地山層までの深さは約50cmあり、３層が黒褐色の泥炭層にちかい状況であった。遺構・遺物は確認されず、遺跡の存在する可能性はないものと推測される。当該地は最上川（松川）の旧河川跡であり遺跡は存在しない。よって、開発には支障ないものと判断した。

第27図　金池調査区位置図

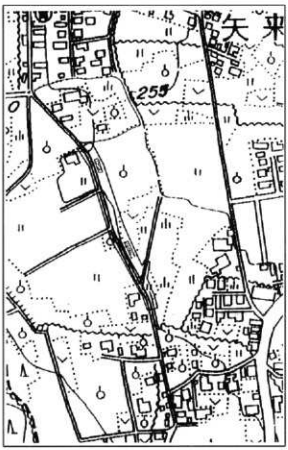
28　遠山調査区

開発予定地は、市街地から西方約２kmに位置し、標高259mを測る。遠山地内に所在する。

当該地の北側には、平成９年度に国指定史跡となった一ノ坂遺跡（縄文時代前期初頭）が隣接して存在している。また、南側には北沢、西明寺遺跡（縄文早期から中期）が分布している所である。

調査は、道路拡幅工事に伴うもので、現況は畑地になっている。

開発予定地に１m×10mのトレンチを２本設定し調査した結果、地山層までは表土下約40cmあり、３層が青灰色シルト（礫を含）の地山層であった。遺構・遺物は確認されず遺跡の存在は確認されなかった。よって、開発には支障ないものと判断した。一ノ坂遺跡に隣接していることから、念のため慎重工事を指示した。



第28図　遠山調査区位置図

29　李山調査区

開発予定地は、市街地から南方約６kmに位置し、標高307mを測る。李山字諏訪道下地内に所在する。

当該地東側400mには、江戸時代初期の護岸遺構である谷地河原堤防が存在する。

調査は、砂利採取に伴うものであり、現況は周囲の水田から約２mほどの微高地であり、地目は原野になっている。

開発予定地に、２m×10mのトレンチを１本設定し調査した結果、地山層までは表土下50cmあり、３層が砂利層（礫多量混入）になっていた。念のため約２m掘り下げて確認しがすべて砂利層であった。また、遺構・遺物は確認されないことから、当該地は最上川（松川）の旧河川跡で、遺跡の存在はない。よって、開発には支障ないものと判断した。

第29図　李山調査区位置図

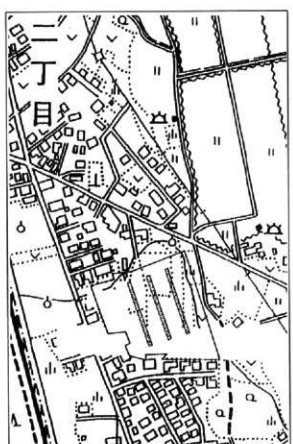
30　東大通調査区

開発予定地は、市街地から北西約３kmに位置し、標高251mを測る。東大通１丁目地内に所在する。

当該地の北西側には、東大通１丁目（縄文・平安時代）が隣接している。

調査は、宅地造成に伴うものであり、現況は水田・果樹園及び原野になっている。付近の地形の状況は、当該地が段丘上あり、直ぐ東側の水田との比高差が約３mあり、遺跡が存在するには良好な環境にある。

開発予定地に１m×40mのトレンチを３本設定し調査した結果、地山層までは表土下35cmあり、３層が砂利を多く含む茶褐色シルト（一部礫多量混入）の地山層であった。しかし、遺跡の存在は確認されなかった。よって、開発には支障ないものと判断した。



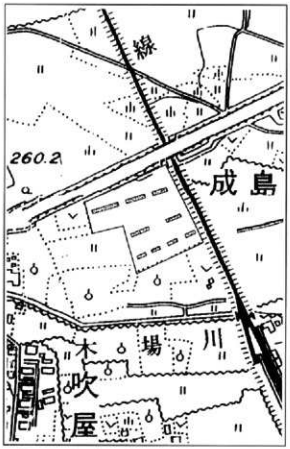
第30図　東大通調査区位置図

31　吹屋敷調査区

開発予定地は、市街地から北西約３kmに位置し、標高251mを測る。吹屋敷地内に所在する。当該地の直ぐ北西側には国道281号線（通称、六部・舘山線）が新設されたことによって、開発が進みつつある地域で、南西側には、広大な遺跡範囲をもつ舘山城跡が隣接している所である。

調査は、宅地造成に伴うものであり、現況は水田・畑地になっている。

開発予定地に２m×50m他８本のトレンチを設定し調査した結果、地山層までは表土下20cmあり、３層が砂利を多く含む茶褐色シルト（礫多量混入）の地山層であった。しかし遺跡の存在は確認されなかった。よって、開発には支障ないものと判断した。



第31図　吹屋敷調査区位置図

32　竹井調査区

開発予定地は、市街地から北東約４kmに位置し、標高246mを測る。大字竹井字野際地内に所在する。

当該地の直ぐ南側には、縄文前期から後期までにおよぶ上谷地ｄ遺跡、西側には縄文時代の野際、上谷地ｄ遺跡が隣接しており、また中世の館跡も多く分布する地域である。

調査は、電話無線基地局設置に伴うものであり、現況は原野他になっている。

開発予定地の隣接地を昨年度、トレンチを設定し試掘調査を実施している。その結果、地山層までは表土下約1.0mあり、４層が茶褐色粘土質シルトの地山層であった。南北に走る北東側は、一段低くなっており盛土の整地層であった。このことから当該地には遺跡の存在はなく開発には支障ないものと判断した。

第32図　竹井調査区位置図

第３節　杢代遺跡

Ⅰ　遺跡の概要

本遺跡は米沢市万世町梓山字杢代に所在する。地元の佐藤氏宅を中心に東西約660m、南北約450mの範囲に分布しており、南方方向には天王川（梓川）が西流している。標高は310mから305mを測り、北方から南方へゆるやかに傾斜している地形であり、北西の沢合からは沢水が年中流れている。現況は畑・森林・宅地であるが、以前は果樹園や池、水田として利用された時期もあった。

遺跡の発見は昭和35年（1960）に山形県教育委員会が実施した遺跡分布調査によるものであり、その依頼を受けた米沢市在住の故宮坂善助氏によって発見、登録された。また、昭和44年（1969）の４月には桑　昭繁氏を中心として、試掘調査が行われた。第32図に示した箇所であり、今回の調査区の北西に位置する地点である。この地点からは３基の石組遺構が検出されている。遺物は縄文時代晩期の土器群が中心をなし、弥生時代の遺物も認められた。故に、当市では数少ない資料を出土する遺跡として注目された。

平成６年の８月29・30日には米沢市教育委員会が試掘を実施している。その結果、沢の入口周辺は遺構、遺物は認められなかった。また東方地点もこの試掘調査によって範囲を把握することができた。

Ⅱ　調査の経過

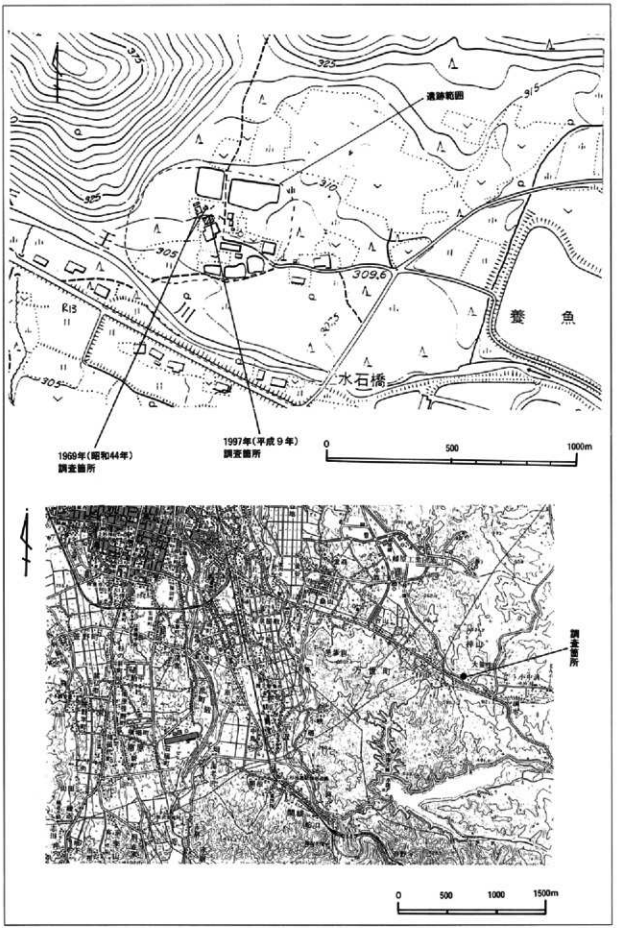
図で示す箇所を平成９年（1997）４月11日～同年４月18日の延べ12日間の日程で発掘調査を実施した。調査の原因は遺跡分布範囲のほぼ中心に位置する佐藤氏宅の新築用地に係るものであり、対象面積である65m²を調査した。

調査開始の時期が融雪期であったことから、沢水が増水しており、調査区においても涌水があった。そのことから水が調査区に入らないように配慮し、表土剥離から開始した。この作業は普通なら重機を使用するが、今回の調査区はⅠ層面からも遺物が出土することから、手掘りによって進めることにした。

Ⅱ層面まで進行した段階で礫群の集中箇所が認められたが、精査の結果、遺構とは認められず、流れ込んだものと理解した。調査区は北方から南方にかけて若干傾斜する地形であり、南方部には水道を埋設した箇所が東西に細長く確認された。地主の話によると、以前、旱魃の年に井戸を掘った跡とのことであり、その箇所の掘り下げは中止する。

Ⅲ層面からⅣ層面にかけては最も遺物の出土量が多く、特に北東部に集中する傾向が認められた。最下層のⅤ層面からは５基の土壙、自然の落ちこみ一箇所が認められた。Ⅰ層から最下層までの深さは１mを測る。すべて砂層であり、西方の沢から流出したものである。調査期間中は晴れの日が多かったが、４月12日には雪が降ったことから午前中で現場作業を中断した。

今回の調査区においては東壁面のⅣ・Ⅴ層に遺物が多く認められ、東方に遺物集中地点が存在するものと推測される。



第33図　杢代遺跡位置図

Ⅲ　検出遺構　〔第33図参照〕

今回の調査区からは図で示す遺構が確認された。いずれもⅤ層面を掘り込んでいる。ＤＹ１からＤＹ５の順で説明を加える。

ＤＹ１は南北に細長い平面形状を有し、長軸3.28m、幅1.1mを測る。東方の縁辺はほぼまっすぐに延びるが、西方の縁辺は南方部でまがっている。深さは平均10cmであった。底面は平坦である。内部からは石鏃が２点出土している。

ＤＹ２はタマゴ形を有する平面形状であり、長径1.1m、短径5.3m、深さは15cmを測る。内部からの出土は認められなかった。

ＤＹ３は円形状を呈し長径64cm、深さは20cmを測る。底面には河原石４点が認められた。遺物としては石鏃１点が出土している。河原石には人工的な加工は認められなかった。

ＤＹ４、５は自然落ちこみ箇所内に認められた。ＤＹ４から一括土器、第37図15が出土している。ＡＺ54は大洞ＢＣ～Ｃ′に併行する深鉢形粗製土器である。遺構群の関連については、明確にできなかった。

Ⅳ　出土遺物〔第33図～第45図参照〕

調査区からは総数で6925点の遺物が出土した。大別すると土器片が最も多く5050点、次いで剥片1791点、石器類46点、礫石器20点、復元土器14点、石製品、土製品各２点であった。土器片は縄文後期末葉から弥生中期の年代幅をもった土器群であるが、大半は縄文晩期に位置する土器群であり、大洞Ａ、Ａ′併行の土器群が中心をなす。層位別にはⅣ層、Ⅴ層の出土数が最も多い。なお吟味の結果、層位的に年代を把握するのは困難な出土状況であった。

器形は、浅鉢・深鉢・台付・注口・小形の壷等があり、口縁部や台付の底部に朱彩された土器も認められた。土器・石器・礫石器・土製品・石製品の順で説明に入る。

(7)土器〔第34図～第42図参照〕

胴部片3888点、口縁部片826点、底部316点、復元可能19点、完形１点が出土した。底部片から想定して、約300点におよぶ土器片と理解される。これらの土器については、実測図や拓影図、写真を必要と認識した183点を選出して図示し、細類を加えた。その結果Ⅰ群からⅦ群に細別した。なお、紙面の都合上簡単に述べる。

Ⅰ群土器〔第39図１～12〕

縄文時代後期末葉に併行する土器群を本群とした。当市の左沢遺跡出土のb2類に類似する１や９の加曽利Ｂ式的な土器群や弧線連結文の型式に分類される３～５、10の２系統が認められる。他に大洞Ｂ１式併行の２・７・11の土器群も若干出土している。

Ⅱ群土器〔第35図２・４、第36図６、第37図12～16、第39図13～25、27～32、34～51〕

縄文時代晩期大洞ＢＣ式併行の土器群である。その中には復元した８点の土器がある。文様は、第35図２の雲形文、第36図６の擦消入組文、多条沈線に刺突文を施文した第37図12、13、第36図７・８等が認められる。本群土器さらにⅡ群ａ類～Ⅱ群ｃ類の３形態に細別できる。

Ⅱ群ａ類土器－大洞Ｂ式からＢＣ式に併行する土器群であり、第35図４の浅鉢形無文土器が

あげられる。底部に一条の沈線を施す。

Ⅱ群ｂ類土器－大洞ＢＣ式併行の中心土器群で、第39図13～25、27～32が上げられる。出土数としては大洞Ａ、Ａ′式併行土器群に次いで二番目に多い土器群である。地文の縄文原体は細身な節であり、直前段多条２段の縄３本を使用しているものが多く認められた。なお、今回図示した土器群は主に文様を施文したものを多く選出したものであり、文様がある土器群に関してである。ちなみに、文様のない粗製土器には前々多条縄等を施文した土器が大半であり、縄文原体の使いわけが認められる。

Ⅱ群ｃ類土器－大洞ＢＣ式からＣ式に併行する土器群であり、第37図12～16、第39図26、34～51の土器群である。入組帯状文系第39図16、17、雲も型文系第35図２、羊歯状文系第39図23～25等の文様が中心をなす。第37図14～16は粗製土器である。いずれも器面内部口縁部に炭化物が付着している。第37図12、13は鉢形土器で四本の沈線を口縁に配し、中央に一条の刺突を配した文様構成である。この２点は口縁部が外反する器形である。他に第39図18、19の同様な文様構成であるが、口縁部が内反する器形を呈す。

Ⅲ群土器〔第35図５、第36図８・７・10、第39図33、第40図53〕

大洞ｃ′式併行の土器群を本群とした。第35図５に代表される文様構成が認められる。この土器はほぼ完形に近い土器であり、文様の全体の構成を見ることができる。口縁部に多条の沈線を配し二条に刺突文を施す。多条を区画する縦位の沈線を施す、鉢形土器である。器面全体に炭化物が付着している。口唇部は小さな山形が連続する。胎土は精製した土を使用しているものと考えられ、薄い器面である。第39図33、第40図53は浅鉢形を有す器形の破片であり、雲形文系の土器片である。浅形鉢は器面全体に文様を施す特徴が認められる。それに対して鉢形土器群は口縁部に集中し、その他は縄文やハケミ文を施文し、仕上げている。

Ⅳ群土器〔第40図54〕

大洞Ｃ２の(新)式に並行する土器群を本類とした。図示したのは第40図54１点だけであるが他に小破片が出土しているが、Ⅰ群土器と同様に微量である。54は注口土器の胴部破片であり雲形文を施文している。焼成はきわめて良好で固く、内面は赤褐色、外面は黒褐色を呈す。

Ⅴ群土器〔第34図１、第35図３、第36図３、第38図17、第40図55～70、第40図71～78、第41図79～86、第41図89～110、第41図87～97、89～110、第42図126～129、133、139、140〕

大洞Ａ式並行の土器群で出土量が最も多い。これらはⅤ群ａ類（Ａ古）、Ⅴ群ｂ類（Ａ古新）、Ⅴ群ｃ類（Ａ新）に細別して述べる。

Ⅴ群ａ類は第34図１、第35図３、第36図３、第40図55～70の土器群である。工字文を主体とする文様を施す。第34図は唯一文様構成が理解できる土器である。残念ながら台付部が若干欠損しており、復元図を図示した。一条のの沈線が残存しているが多条で台付部を施文すると考えられる。第40図55～57は貼付と沈線で文様を施すグループ、沈線、貼付、刺突を施す同図70や沈線で文様を構成する同図58、60等がある。

Ⅴ群ｂ類は第40図71～78、第41図79～86が上げられる。沈線文や無文帯を口縁歩に配す土器群である。口唇部は平線と山形状の両者がある。

Ⅴ群ｃ類は第38図17、第41図87～97、89～110、第42図126～129、133、139、140が認められる。第38図17は折り返し口縁部を有す深鉢形土器であり頸部に二条の沈線を配し、中央部に刺突文を施し、以下はハケメ文を施文している。

第42図111～124は綾杉文のグループである。同図112は壷形を呈す器形である。第41図89浅形鉢を呈す器形で、口縁部文様帯には朱彩され、赤褐色を呈す。焼成は良好である。第41図87～97は工字文を施文した土器群である。同図97に朱彩が観察された。第42図126～129と133、139、140は浮線網状文系の土器群である。同図128、133を除き小形土器の破片であり、口縁部が直立する器形と内反する器形が認められた。第41図89～110は折り返し口縁を有すグループであり、折り返し箇所に縄文原体を押圧した土器が多く見受けられる。

Ⅵ群土器〔第42図125、130～137、141～145〕

大洞A′(古)氏式並行の土器群であり、入組帯状文系統の最終形態である変形工字文のグループと理解される。本群土器は弥生時代の前期へと続く土器群の一系統と言える。

Ⅶ群土器〔第42図146～150〕

弥生時代中期初頭の土器群を本類とした。変形工文と磨消縄文とで文様を構成する山王Ⅲ式併行と考えられる。今回の調査からは５点の出土であった。

石器〔第43図～第45図〕

石鏃33点、石篦６点、石匙１点、石錐２点が出土している。石材は頁岩が主体をなすが、赤色、緑色、白色等の色彩を有す岩石を好んで使用している。石鏃は有茎鏃が大半を占める。第43図４、６の石鏃基部には矢に固定させるために使用した接着剤が付着している。両者とも欠損した状態であり、完成後に使用した際の欠損と言える。第44図28～33は石錐の未完成と理解したい。石匙は第44図36の横形石匙であり、縁辺に使用痕が観察された。磨製石器としては、第45図43、45の２点が出土している。基部が残存する形態であり、刃部が欠損している。礫石器は図示しなかったが、石皿２点、凹石18点の合計20点の出土であった。

土製品〔第十六図版155、156〕

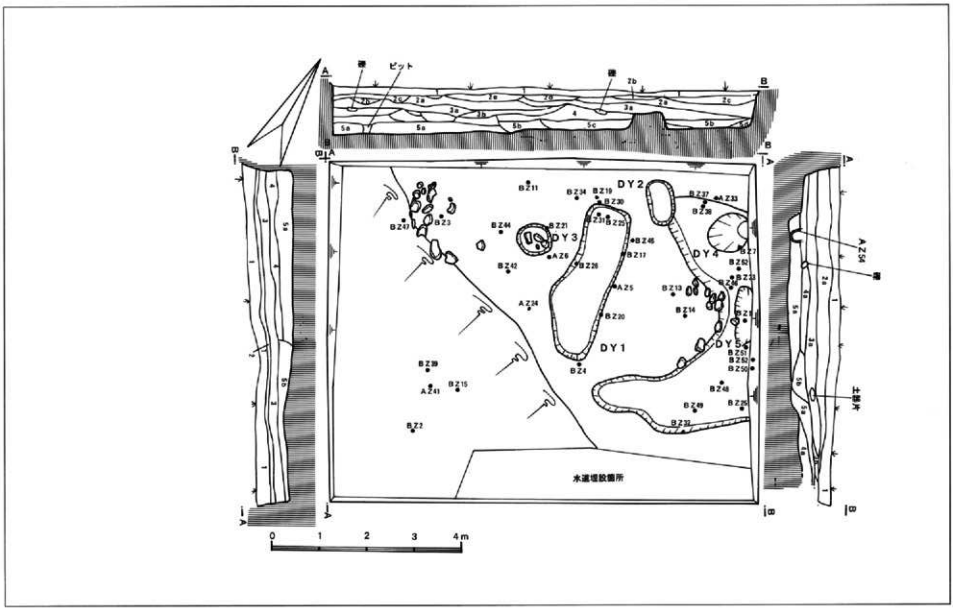
耳栓形耳飾り、円盤状耳飾りの２点出土している。前者は完形で朱彩されている。後者は破片であり、全容は不明と言わざるを得ない。

石製品〔第45図44、46～48〕

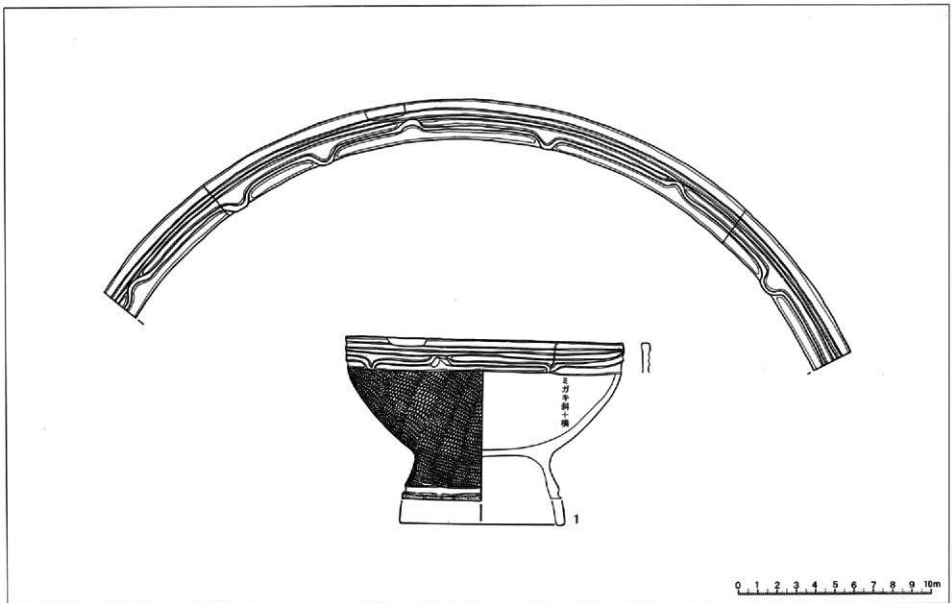
石棒、石剣、抉状耳飾り、円盤状石製品各１点、合計４点出土している。いずれも欠損や未完成と考えられる。

Ⅴ　まとめ

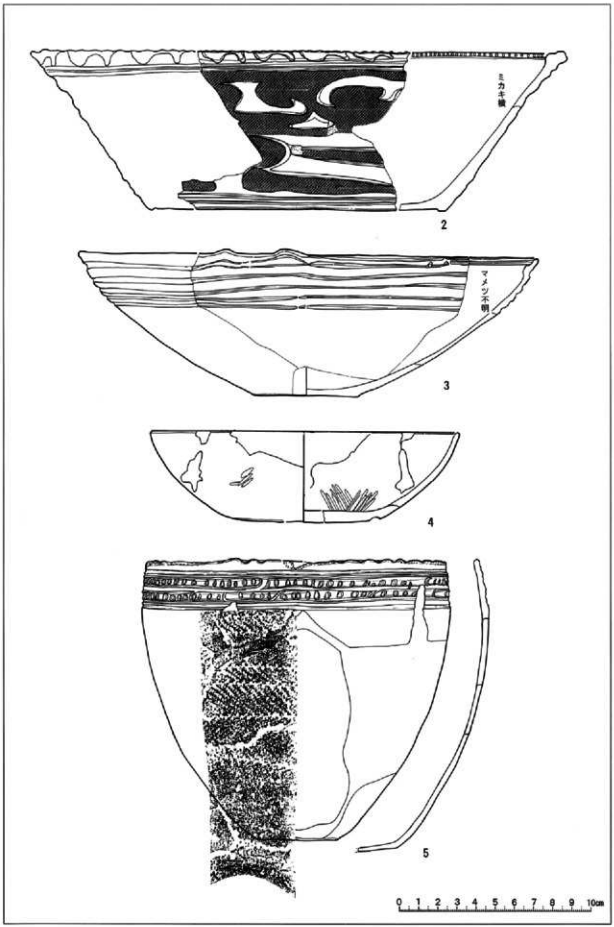
小範囲な調査区にもかかわらず出土した遺物の数量は膨大なものであった。しかも、本市において、解明されていない縄文晩期から弥生時代に移行する遺跡であることが土器の吟味によって判明した。遺構については残念ながら明確に解明できなかったが、今後とも本遺跡の解明及び保護に前進してゆきたい。最後に今回の調査に際してご協力いただいた、地主の佐藤氏はじめ関係機関に厚く感謝申し上げます。



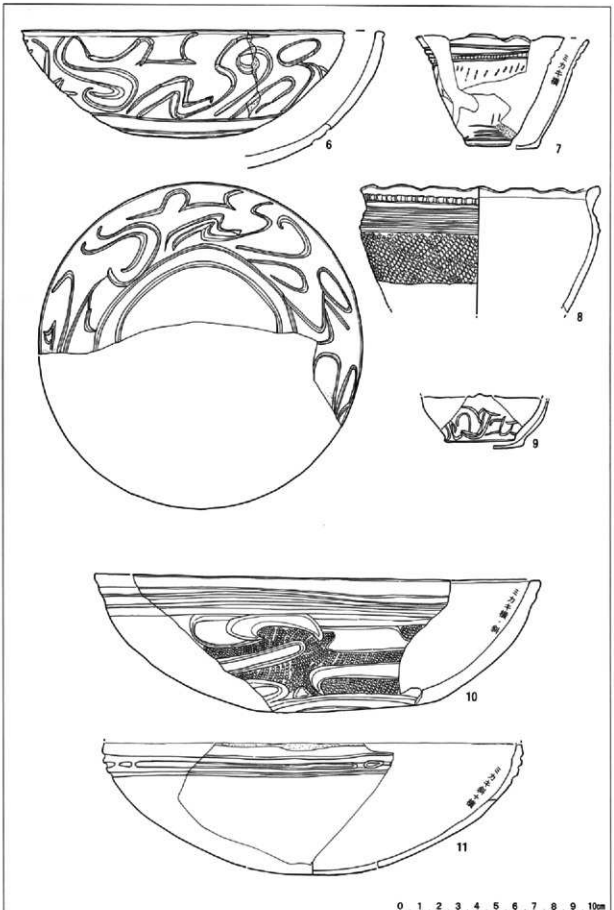
第34図　杢代遺跡遺構全体図



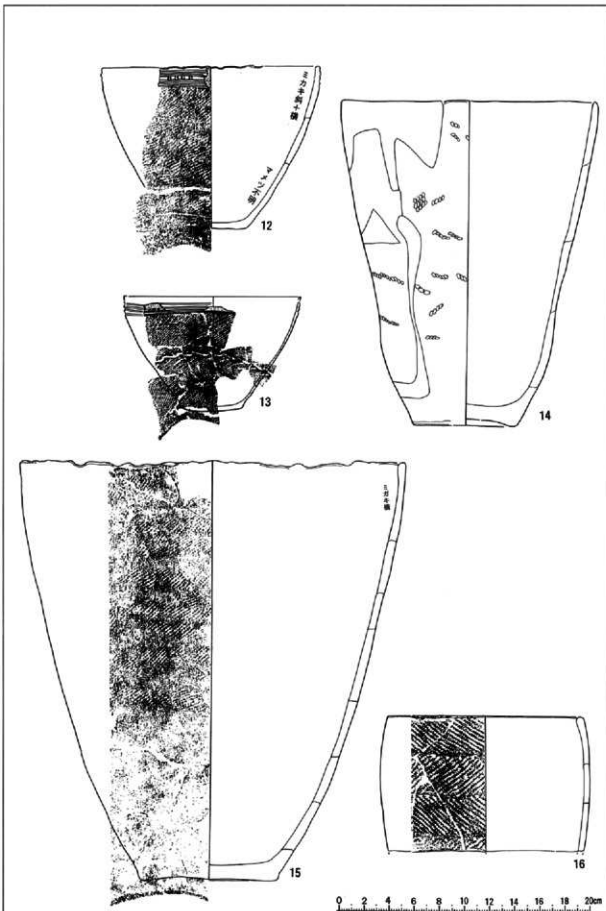
第35図　走代遺跡出土土器実測図（1）



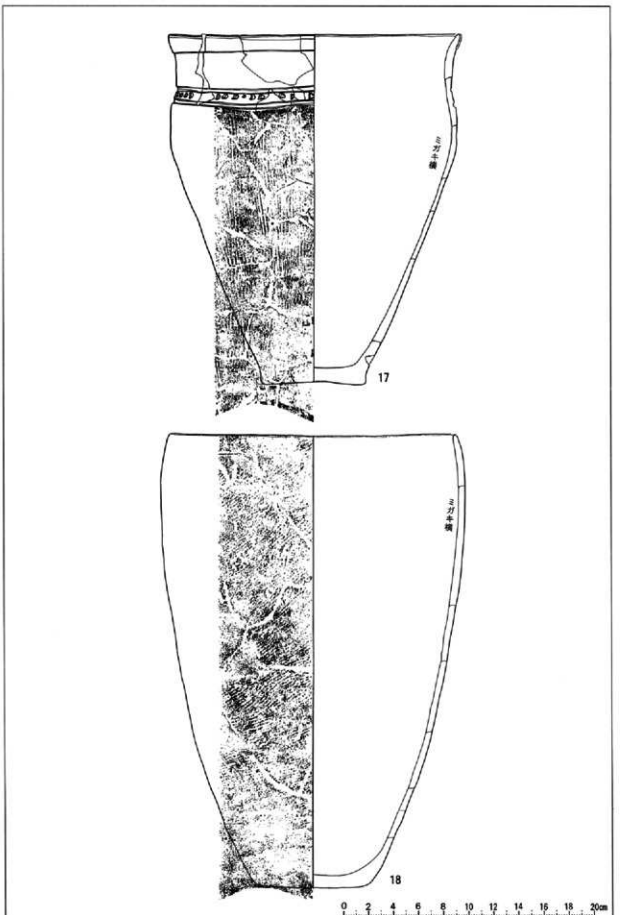
第36図　歪代遺跡出土土器実測図（2）



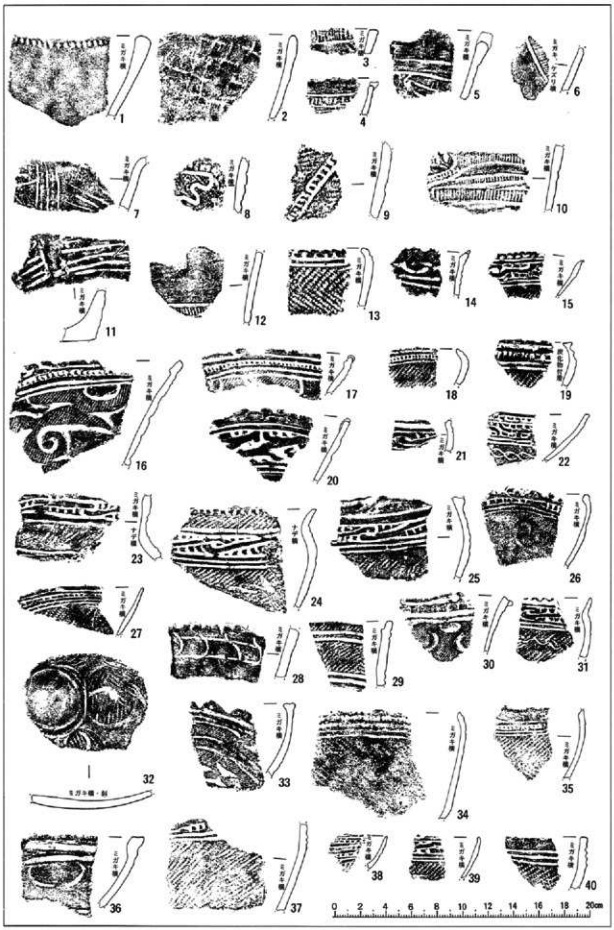
第37図　杢代遺跡出土土器実測図（３）



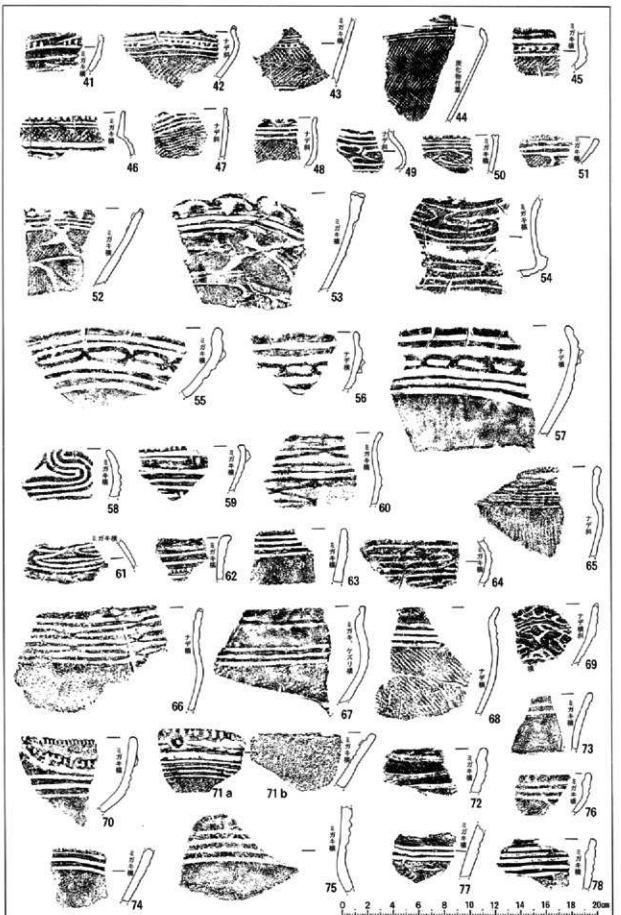
第38図　李代遺跡出土土器実測図（4）



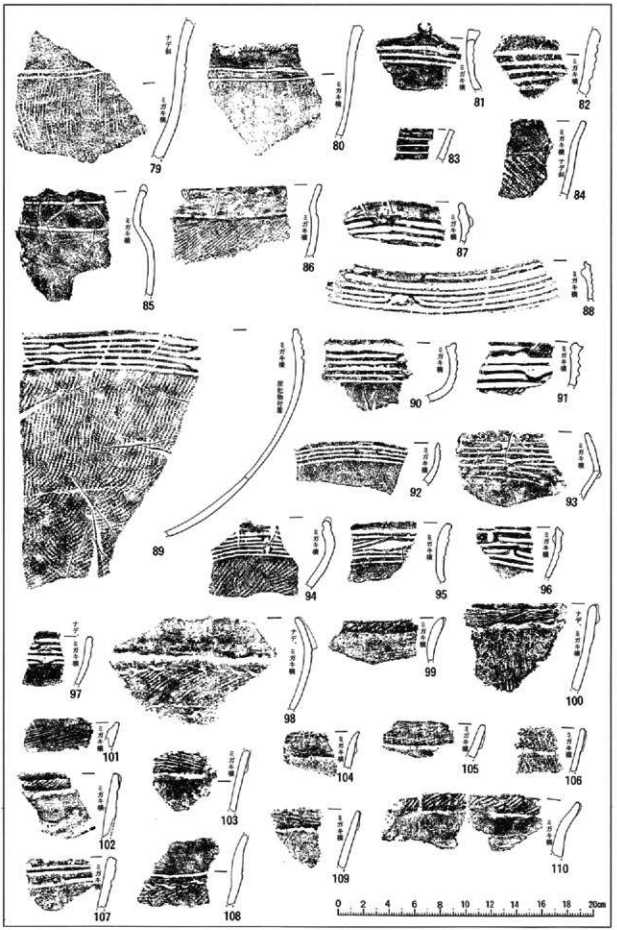
第39図　杢代遺跡出土土器実測図（5）



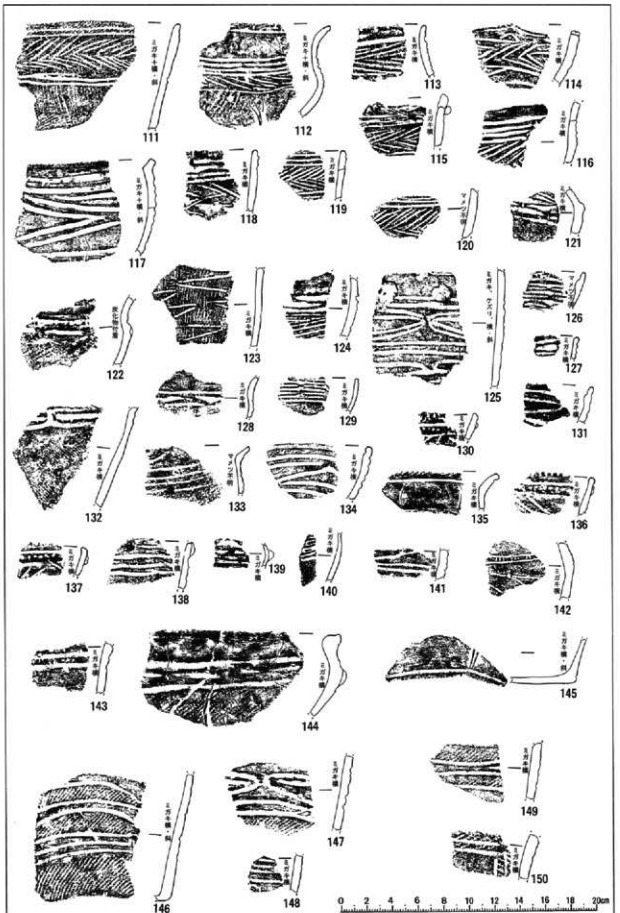
第40図　杢代遺跡出土土器拓影図（1）



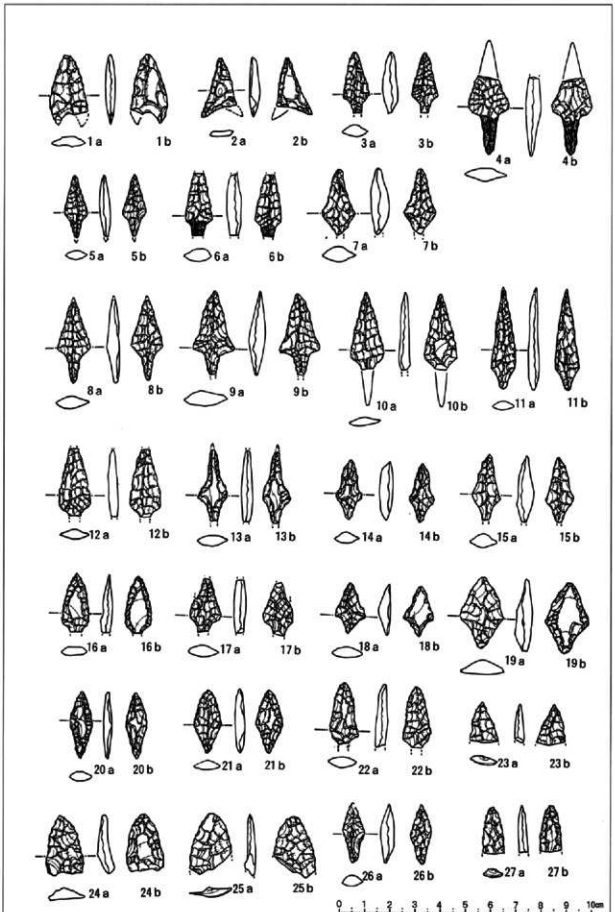
第41図　圭代遺跡出土土器拓影図（2）



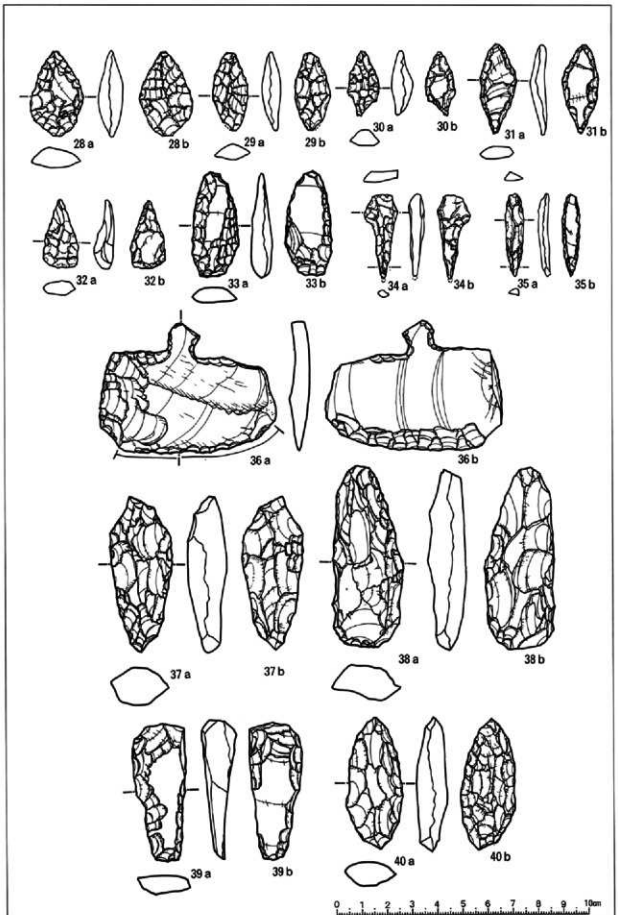
第42図　歪代遺跡出土土器拓影図（3）



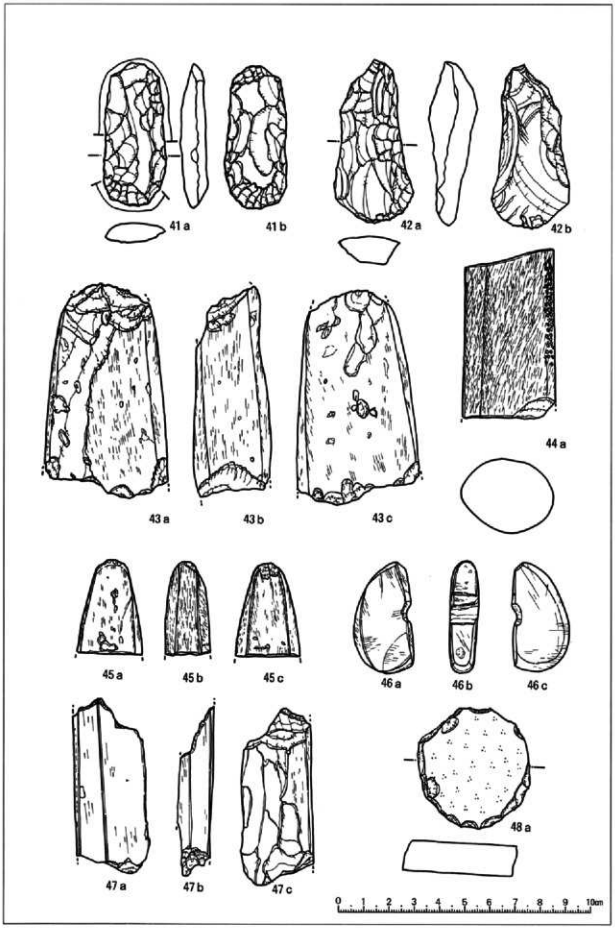
第43図　歩代遺跡出土土器拓影図（4）



第44図　杢代遺跡出土石器実測図（1）



第45図　圭代遺跡出土石器実測図（2）



第46図　杢代遺跡出土石器実測図（3）

第4節　大樽遺跡

Ⅰ　遺跡の概要

本遺跡は、米沢市の南西部に位置す舘山四丁目地内を中心にあり、周辺には第46図で示すように多くの遺跡が分布する。これらの遺跡群は鬼面川によって形成された河岸段丘上に位置し斜平丘陵の北端山麓に沿って確認されている。一連の遺跡群の最も東端には国指定史跡の「一ノ坂遺跡」が位置す。

この一帯の調査としては、昭和61年（1986）8月に「生蓮寺遺跡」を住宅新築に係る発掘調査として実施したのが最初で、その後も同様な理由で発掘調査が行われ、一連の調査としては5回目となる。

これらの調査から、当地内には縄文時代早期、前期、中期、後期、晩期、中世、近世に係る遺構、遺物が出土しており、広範囲に分布する複合遺跡であることが判明している。特に縄文時代の古い時期から継続して存在する例は米沢地内でも数少なく、八幡原遺跡群に次ぐものである。

また、歴史的に見ると、伊達治家記録天正十二年の項に「此月（十月）、公隠居所トシ給ウ。其間、鮎貝安房宗重宅ニ御座ス。天正十三年ニ至テ普請成就ス。即チ舘山へ移住シ給フ」とある。具体的な場所などについては不明であるが、舘山発電所がある長峯山には米沢で最大の山城がある。当然、平地にもこの山城に関る大集落が存在したことは容易に推測される。

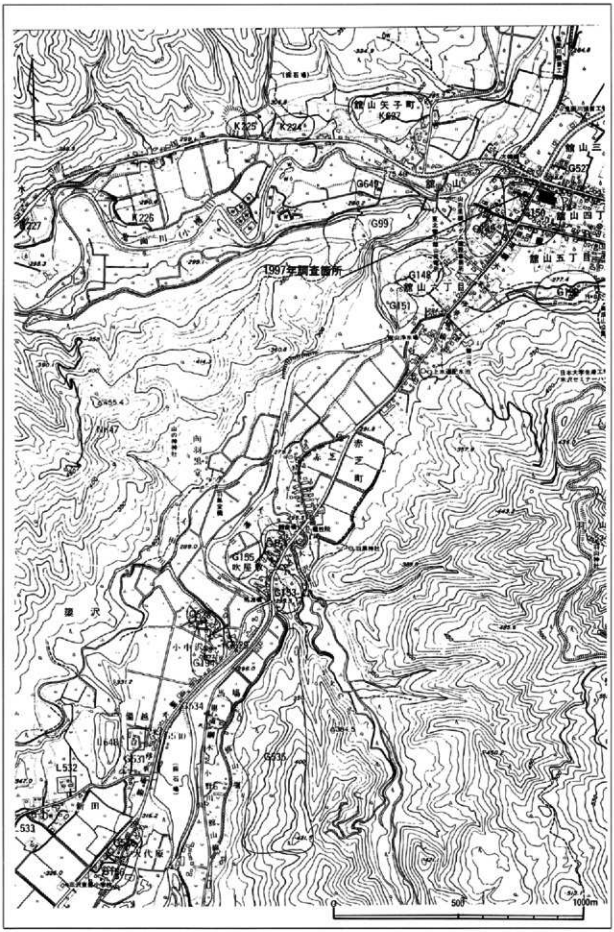
Ⅱ　調査の経過

住宅地に伴う発掘調査として、平成9年（1997）4月15日～同年4月23日の期間で実施した。調査面積は98㎡である。4月23日の重機による表土剥離から開始した。調査区の東側が道路拡張予定地で空地になっているのでこの箇所に残土を置くことにした。この作業は1日で終了した。

調査区の西方には礫が多数出土しており、旧河川跡を想定させる状況であった。しかしながらこの礫層面からは縄文早期土器片が出土しているので、それ以前に形成された礫層と考えられる。また、一見して中世、近世と理解される遺構群も検出され、これらの遺構群から精査を開始した。ピット群が多いことから「ＰＹ」と番号を付け、半裁結果をもって柱穴ならば「ＴＹ」の略号に付けかえた。近世の井戸跡、流し場等が検出されたこともあり、これらの遺構群を中心に調査を進めた。

その結果、縄文土器片が中世、近世の遺構群から出土しており、縄文時代の遺構の大半が重複関係にあると理解した。井戸跡の内部には多量の土砂で埋まっていたので、石組をそのままにして、土砂を取り除いた。深さ30㎝まで掘り下げた地点で崩落のおそれがあるので掘り下げを中止した。ボーリングではあと1ｍ位は下る様相を呈す。

4月21日までに掘り下げを終了し、写真撮影を実施した。翌日の4月22日は一日中雨降りで調査を中止した。4月23日には図面作成や遺物の取り上げ等を行い、午後からは発掘用具を撤収して、今回の調査を終了した。



第47図　大樽遺跡位置図

Ⅲ　検出遺構〔第47～50図参照〕

今回の調査区からは56基の遺構群を検出した。ＤＹ（土壙）15基、ＴＹ（柱穴）８基、ＰＹ（ピット）26基、ＳＹ（集石遺構）２基、ＨＹ（竪穴住居跡）１基、流し場跡１基、井戸１基、ＫＹ（溝状遺構）２基となる。列挙した順に説明を加えたい。

土壙（ＤＹ１～15）

縄文時代に位置する土壙は第48図に示したＤＹ13がある。平面形状は楕円形状を有し、長径2.0cm、短径1.7cmを測る。深さは30cmある。埋土からは大木８ｂ式併行の口縁部片が出土している。ＨＹ１、ＴＹ10、井戸跡と重複している。これ以外の土壙群は中世、近世に位置付けられるものである。構築目的としては墓壙と考えられるＤＹ１が上げられる。他はゴミ捨穴と考えられる。

柱穴〔ＴＹ２～４、７、８、10、12、18〕

調査区の北東部に集中して検出された。いずれも埋土から判断して中世、近世に位置づけられる遺構群である。平面形状は円形状を有し、深さは平均50cmを測る。掘立柱建物を構成する遺構と考えられるが、関連性は見出せなかった。

ピット（ＤＹ１、５、６、９、11、13～27、29～34）

調査区の全域に亘って、認められる遺構群である埋土から縄文時代と、中世、近世に区別される。縄文時代に位置するものとしては、ＰＹ11、25～26がある。埋土は黒褐色を呈し、固い特徴を有すもので、一連のピット群は竪穴住居跡に伴うものと推測される。

これ以外のピット群は中世、近世に構築されたピット群である。埋土には少量の焼土を含むものも認められた。全体的に埋土は茶褐色を呈し、やわらかい。掘立柱建物等に関連すると考えられるが、柱穴群と同様に関連性は見出せなかった。

集石遺構（ＳＹ１、２）〔第50図参照〕

調査区のほぼ中央、南方よりに２基検出された。埋土から陶磁器が出土しており、近世に位置付けられる。平面形状は両方とも円形状を呈し長軸1.1mを測る。深さは50cmあり、埋土には多量の礫を含む。当初、墓壙と考えたが、それを裏付ける根拠が見出せなかったことから不明遺構と言わざるを得ない。

竪穴住居跡〔ＨＹ１〕

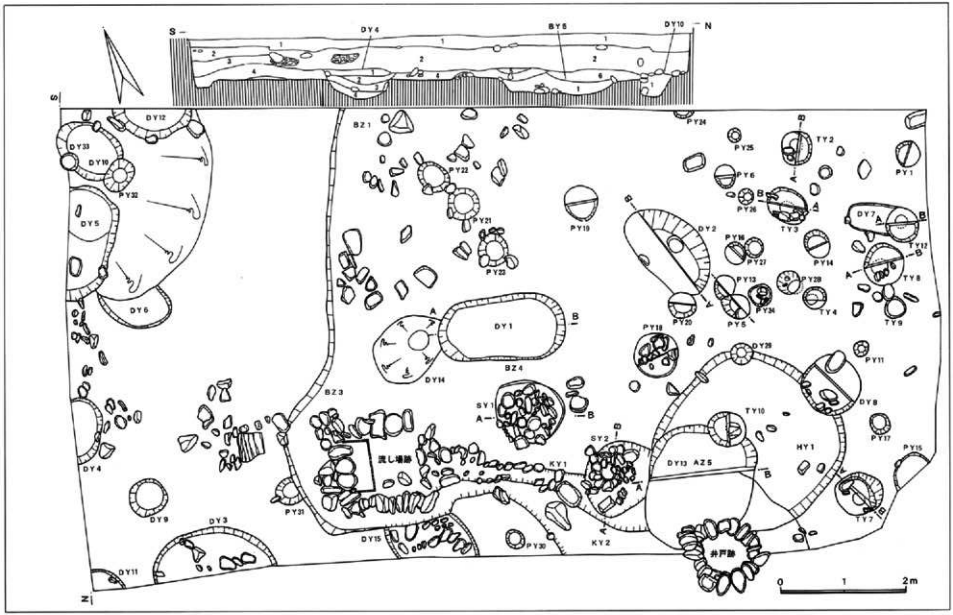
調査区の東南部に位置し、約３分の２を完掘した状況を呈す。縄文時代中期の土壙との関係から、この土壙と前後する年代が考えられる。柱穴や炉跡は確認できなかった。

流し場跡

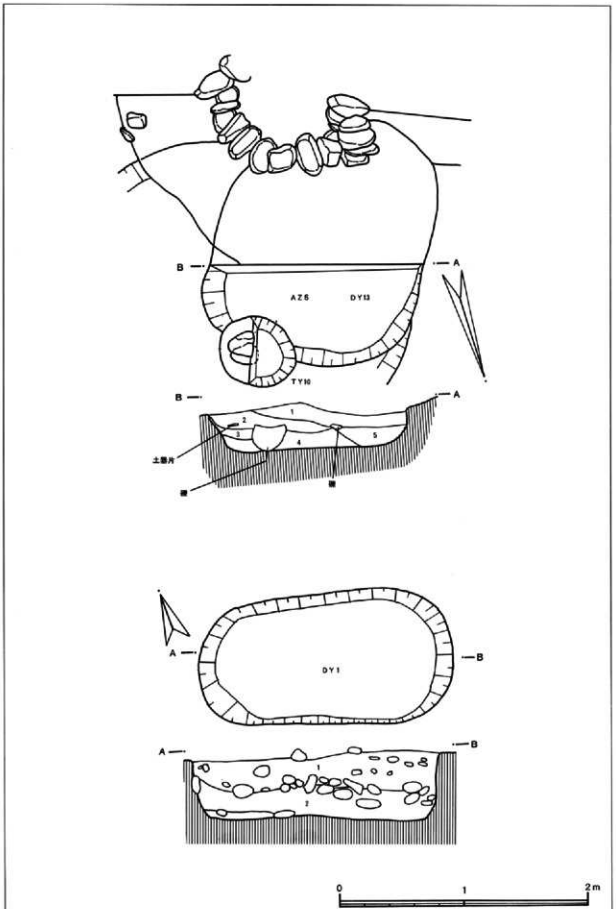
大形の河原礫を使用して方形に配置した形態を有し、板材を用いて水をためる場所をつくっている。近世の民家に伴う施設として考えられる。

井戸跡

丸掘した後に壁面に対して長円形に礫を積み上げ構築した近世の井戸である。深さは約４ｍある。これに伴う遺構として、ＫＹ１、２、前述した流し場跡が上げられるが、これらの遺構が同一時期に存在したかは明確には言えない。



第48図　大梯遺跡遺構全体図



第49図　大樽遺跡遺構平面図（1）

Ⅳ　出土遺物〔第51図～第53図〕

今回の調査区からは総数で1530点出土している。土器片が最も多く1135点、剥片305点、陶磁器15点、礫石器７点、石器５点、土製品３点であった。これらの中で図を必要と認識した64点については拓影図や実測図を作成した。以下、土器、石器、陶器類に大別して説明を加える。

土器片の分類

出土した土器群は胎土や文様表出技法から縄文早期中葉、縄文前期初頭、縄文中期中葉、縄文時代後期初頭、縄文晩期の各時期に位置する土器群である。これらの土器群は類別が可能であり、Ⅰ群土器（縄文早期）、Ⅱ群土器（縄文前期）、Ⅲ群土器（縄文中期）、Ⅳ群土器（縄文後期）、Ⅴ群土器（縄文晩期）に大別し、さらに特徴を加えて説明したい。

Ⅰ群ａ類〔第51図１～３〕

貝殻文を施した土器片で、平行沈線文と格子目状沈線文を特徴としている。関東の田戸上層に併行するもので、焼成はすこぶる良好で色調は茶褐色を呈す

Ⅰ群ｂ類〔第51図７～10〕

簾状角押圧文を基本とする土器群である。関東地方の田戸上層に併行するものと考えられ、本市万世町ニタ俣Ａ遺構Ⅲ期の土器群に分類される。

Ⅱ群ａ類〔第51図11～13〕

羽状縄文を施文した土器片で縄文前期初頭に位置する。関東の花積下層の後にくる同地方の二ツ木、東北の松原式に併行する。胎土にやや大粒の石英と少量の繊維を含む。

Ⅱ群ｂ類〔第51図14、15〕

胎土や文様の施文から吟味して大木１併行の土器と考えられる。14は底部にも縄文を施文している。15は口縁部片であり、一条の沈線を配す。

Ⅱ群ｃ類〔第51図16、17、20、21〕

前々多条の縄を原体とする縄文を施文し後に半裁竹管によって沈線を斜位、平行に配す文様構成であり、大木３式併行の土器群である。焼成は良好で胎土に繊維を多量に含む。

Ⅱ群ｄ類〔第51図18〕

粘土紐を貼付し、きざみを加えることによって山形文に仕上げた文様を有すもので、大木４式平行の土器である。貼付文の上部は口縁部文様帯と胴部を区画する手法と推測される。焼成は良好で、胎土に小粒の石英砂と少量の繊維を含む。

Ⅱ群ｅ類〔第51図19〕

半裁竹管によって施文した文様を有す小形土器の破片である。小破片であることから全体の文様構成は不明である。東北南部の大木５式に併行すると見られる。類例としては本市遠山町西明寺遺跡から出土している。２点認められたがいずれも小破片であった。その後の大木６式併行の土器群は多数出土しているが、この時期は本市においても少ない。

Ⅲ群ａ類〔第51図22、24、26～29、31～36〕

貼付による渦巻文の特徴から大木８ａ式併行の土器群である。いずれも破片であり、復元できる破片はなかった。器面に炭化物が付着している破片が多い。

Ⅲ群ｂ類〔第51図23、25、30〕

調整貼付文、調整沈線文で文様を構成するもので大木８ｂ式に併行する土器群である。ちなみに　大木８ａ式併行の特徴のひとつに無調整の貼付文が上げられる。23、25はキャリパー形深鉢土器の口縁部片である。

Ⅳ群ａ類〔第52図40～55〕

胎土や文様から関東の堀之内Ⅰ式併行の土器群である。50は縦位に蛇行する沈線であり、東北南部の南境式土器にも見られる文様である。

Ⅳ群ｂ類〔第51図37〕

入組文を施文した加曽利Ｂ式併行の土器片と考えられる。本市赤崩地区の左沢遺跡や万世町ニタ俣遺跡に出土例がある。

Ⅴ群ａ類〔第51図39〕

大洞Ｃ′式併行鉢形土器の破片と考えられる。晩期に位置する土器片はこの１点だけである。

土製品〔第51図38、第52図57、第53図２〕

土器片を円形に研磨によって整形した円盤状土製品である。堀之内式併行の土器を使用して製作している。第53図２は土面の破片と推測され、貫通する穴を有す。

石器〔第53図１～５〕

剥片石器と礫石器に大別される。前者は剥片305点、石鏃４点、打製石斧１点、後者は凹石５点、石皿１点、磨石１点の出土数であった。剥片石器の石材は大半が頁岩を使用しているが第53図１の石鏃だけ黒曜石を使用している。同図５は刃部が一次剥離を利用した打製石斧であり、縄文時代早期～前期初頭に位置す石器と考えられる。

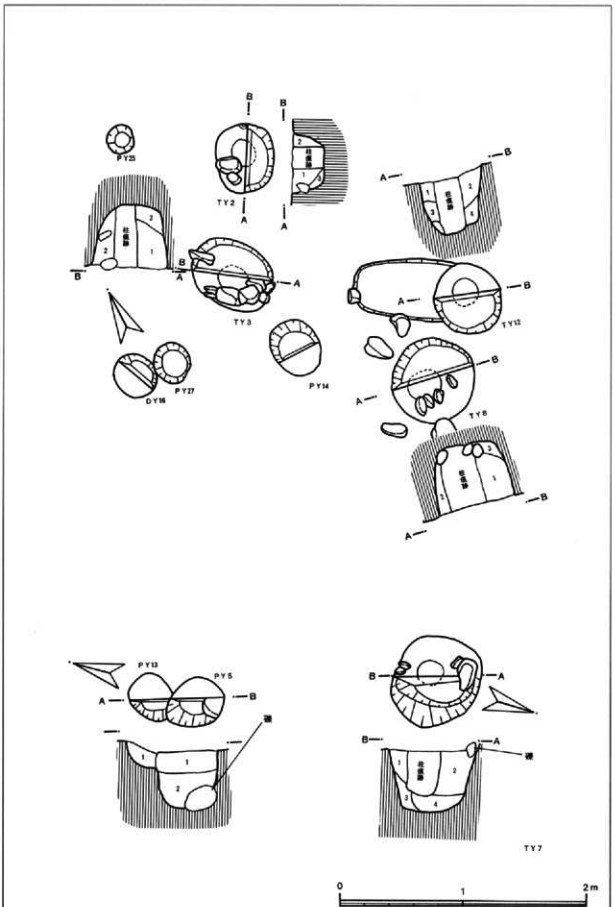
陶器類〔第53図１〕

出土した陶磁器は呉須や器形から近、現代に位置するものであり、割愛したが、カワラケ１点を図示した。この遺物は年代幅をもっているので、どの年代に位置するかは不明である。

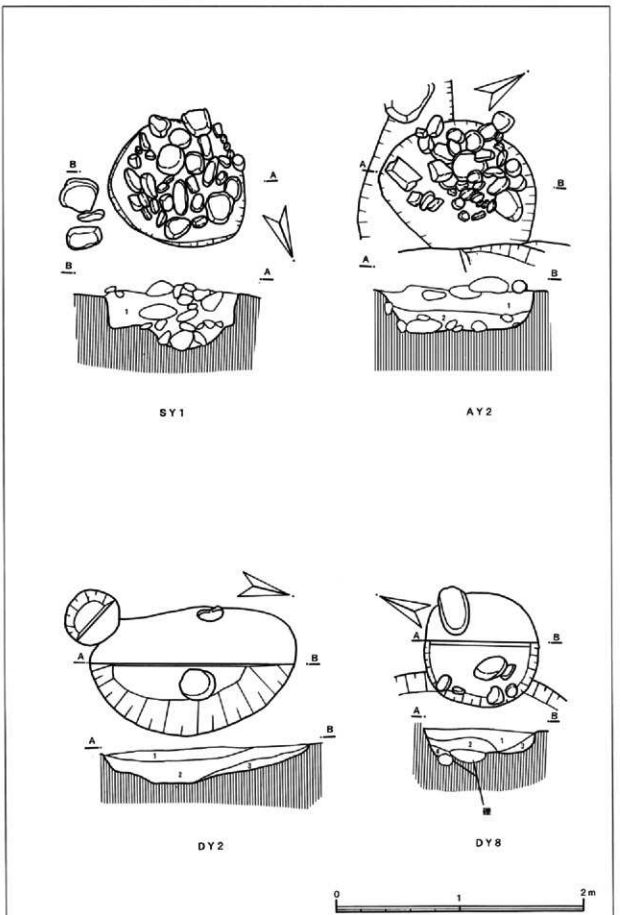
Ⅴ　まとめ

縄文時代の各時期に亘って遺物が出土したことは、あらためて大複合遺跡であることが裏付けられた。しかしながら、遺構は明確に把握できなかったことが懸念される。これは、中世や近世の遺構と重複する関係もあると考えられる。調査区の半分が礫層だったにもかかわらず遺構が構築されていることは、この地域が居住する条件をいかに満たしていたかがうかがえるものである。

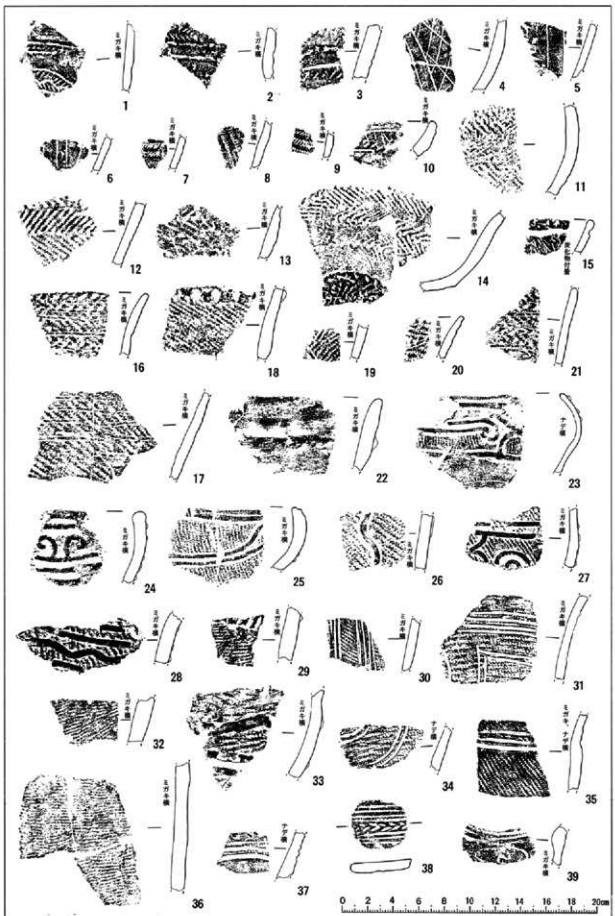
また、この地区は道路の拡張工事が計画されている。これに伴う発掘調査も予想され、これら一連の調査の資料を集積することにより、大樽遺跡の解明に向けて邁進したい。最後に今回の調査にあたりご協力いただいた関係機関に厚く感謝申し上げます。



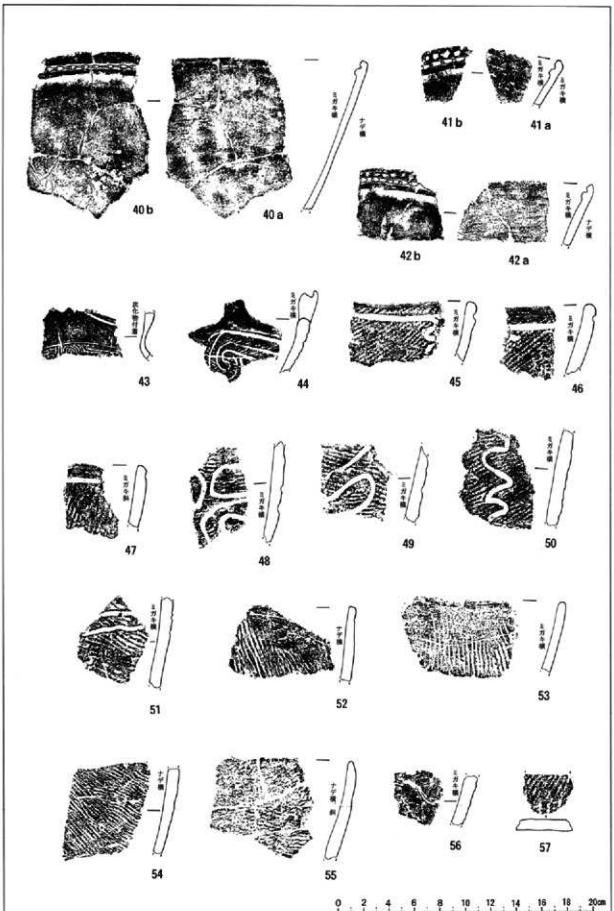
第50図　大樽遺跡遺構平面図（2）



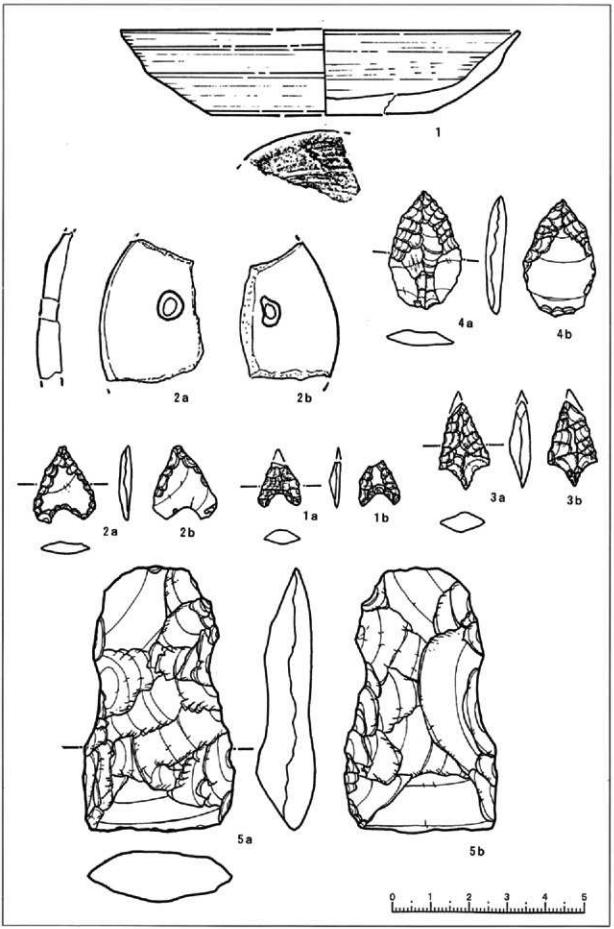
第51図　大樽遺跡遺構平面図（3）



第52図　大樽遺跡出土土器拓影図（1）



第53図　大樽遺跡出土土器拓影図（2）



第54図　大樽遺跡出土遺物実測図（1）

第５節　大塚山遺跡

Ⅰ　遺跡の概要

本遺跡は、米沢市街地南方約３kmに位置し、米沢市諸仏町大字笹野本町他に所在する。遺跡は東西約500m、南北約600mの範囲に分布している。また、南東側には隣接して大壇Ａ～Ｃ遺跡が存在し、これらの遺跡を含めると遺跡範囲は約83,000㎡の広範囲になる。標高は270～272mを測る。

遺跡付近の地形は、遺跡範囲から東側及び西側へ緩やかかに傾斜しており、一段高い台地状に立地している。現況は宅地・水田・畑などになっている。

本遺跡に隣接する大壇Ａ遺跡の発掘調査は、昭和58年（1983）に置賜考古学会が実施している（第54図参照）。また、昭和59・60年（1984・1985）には、公立高校の移動新築に伴って、山形県教育委員会が発掘調査を実施している。更に、昭和62年（1987）には、本遺跡及び大壇Ａ遺跡の試掘調査を、本市教育委員会が国庫補助を得て遺跡群細分布調査を実施した初年度にあたる。

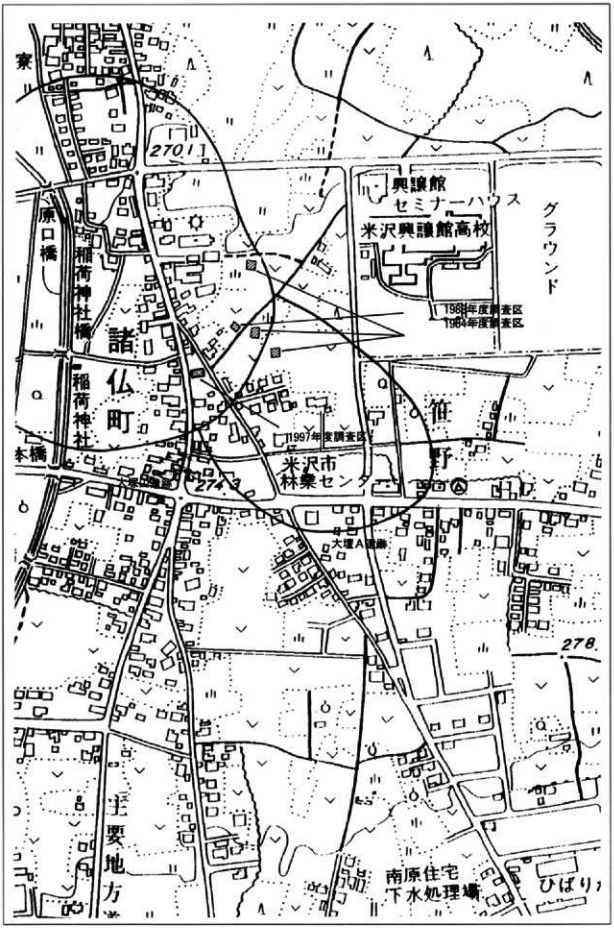
この調査よると、大塚山遺跡では、表土下約15cm程度で土器埋設複式炉を伴う竪穴住居跡１棟、土壙十数基などが検出している。大壇Ａ遺跡の調査では、大塚山遺跡と同様に土器埋設複式炉を伴う竪穴住居跡１棟、他に重複して竪穴住居跡１棟の計２棟の住居跡や、土壙十数基が検出している。両遺跡の調査によって出土した遺物には、土器や石器があり、縄文前期初頭、同中期中葉、同中期末葉の土器が多量出土しており、僅かに同後期初頭、同晩期の土器が含まれていた。このことから縄文前期初頭、同中期を中心とした遺跡であると推定されている。

Ⅱ　調査の経過

今回の調査は、個人の住宅に伴う緊急発掘調査である。当市建築課から当該地が遺跡包蔵地になっていることから参照依頼があった。遺跡地図で確認したところ、大塚山遺跡南側範囲に位置することから、開発予定地に１ｍ×２ｍのトレンチを等間隔に３箇所設定して試掘調査を実施した。その結果、東側トレンチの撹乱層から、縄文土器片や石器片が数点出土したことから、開発者にその旨を告げ協議した結果、発掘調査をするに至たった。

調査は、平成９年４月７日から実施した。調査区は、開発範囲（住宅建設予定地）に限定していることから、まず始めに、その部分の約204㎡の表土剥離を重機で行った。表土下50cm前後で遺構確認面が確認されたが、西側は表土下約30cmと浅く、東側が約50cmと東側に従って緩やかに低くなっており、遺構確認面は遺跡付近の地形とほぼ同様である。本調査区内には以前に建物が建っていたことから撹乱している部分もあった。

翌４月８日からは、遺構を確認するための面整理、精査を順次進めた。その結果、東側において土壙と判断される遺構が数基確認された。また南側部分においては、堆積土が厚く、包含層の落ち込みが確認された。確認後は各遺構のベルトを残し掘り下げ、適宜、土層のセクション、写真撮影などの記録作業を実施し、４月24日に調査を終了した。



第55図　大塚山遺跡位置図

Ⅲ　検出遺構

今回の調査で検出された遺構には、土壙（フラスコ状を含）２基、柱穴５基などある。これらの遺構は、本遺跡の基本層序がⅠ～Ⅲ層まであるが、遺構の確認面はⅢ層下から確認されたものである。以下、検出された土壙・柱穴について、規模、形態などについて概述する。

ＤＹ１土壙（第56図　第25図版）

調査区の南東壁側に確認されたものである。平面形は不正方形を呈し、2.5～2.6m、深さ50cmを測る。掘り方は、ほぼ急激で、底面はほぼ平坦である。埋土は４層確認されている。北東側で一段深くなっている部分が確認されたが、この部分については、後に確認されたことであるが、当遺構以前の遺構（ＤＹ16）が重複していると判断した。なおこの以前の遺構は、東側で袋状になっていることから袋状土壙とした。ＤＹ13と16重複し、双方を切る。

ＤＹ３土壙（第56図　第25・27図版）

調査区の南東側に確認されたもので、平面形は円形を呈し、1.2～1.3m、深さ70cmを測る。東側以外は袋状になっている。掘り方は、東側が底面から上部付近まで袋状に掘り込んでおり、上部直下で外反する。東側以外は底面から上部付近までほぼ急激に内湾する。底面は平坦である。埋土は８層に確認されており、２層上部から土器が出土している。

ＤＹ４土壙（第57図　第25図版）

調査区の東側に東西に延びる浅い溝状の中に確認されたもので、平面形は楕円形を呈し、1.4～2.1m、深さ約50cmを測る。掘り方は、南側以外は緩やかに掘り込んでいる。底面は鍋底状である。埋土は５層に確認されている。

ＤＹ５土壙（第57図　第25図版）

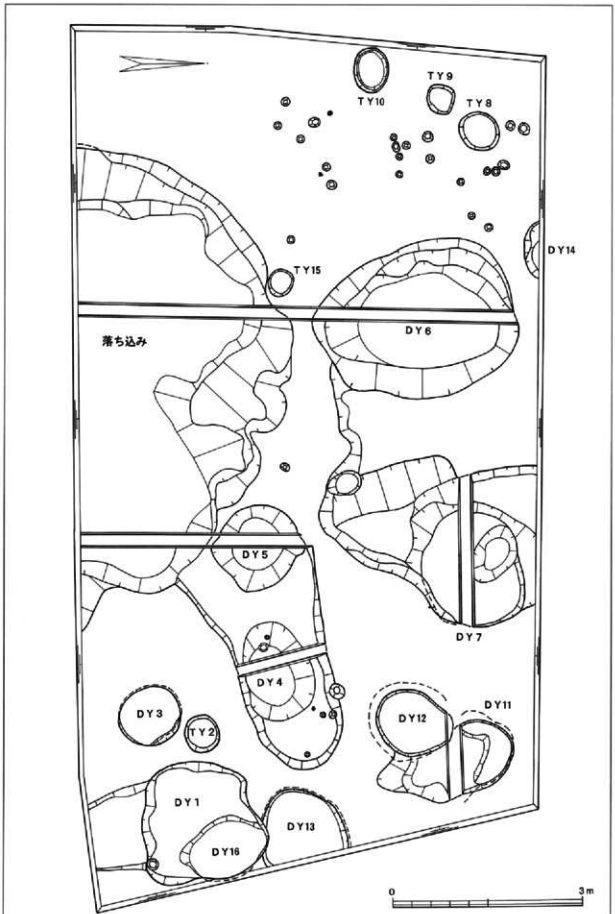
ＤＹ４と同様、調査区の東側に東西に延びる浅い溝状の中に確認されたもので、平面形は東南北側の三方が若干突出しているが、ほぼ円形を呈し、約2.0m、深さ55cmを測る。掘り方は、緩やかに掘り込んでいる。底面は鍋底状である。埋土は５層に確認されている。

ＤＹ６土壙（第58図　第25図版）

調査区の西側に確認されたもので、平面形は南北に長軸をもつ不正楕円形を呈し、3.3～4.4m、深さは南側が浅く約70cm、北側が深く約80cmを測る。掘り方は、東北側が底部から急激掘り込んでいるが、南西側には段を有する掘り方をしている。底面は北側から中央部にかけて鍋底状であり、南側にかけて平坦になり、緩やかに立ち上がる。埋土は５層に確認されている。出土遺物には、石錘と石匙の２点と他に土器片が十数点あるが、５層上部からの出土であることから後世の流れ込みと判断される。

ＤＹ７土壙（第57図　第25・27図版）

調査区の東壁側に確認されたもので、平面形は北側が調査区外であり不明であるが、不正楕円形を呈し3.1m、深さ1.1mを測る。掘り方は、南東側の一部で底部から急激掘り込んでいるが、他は段を有する掘り方をしている。北側の底面には一段低い落ち込みがある。埋土は５層に確認されている。４層は炭化物がレンズ状に確認している。出土遺物には、近世の陶磁器類がある。



第56図　大塚山遺跡遺構全体図

ＤＹ11土壙（第56図　第25図版）

調査区の北東側に確認されたもので、平面形は南側でＤＹ12と重複するため、不明であるが不正楕円形を呈するものと推測され、約1.5m、深さ1.25mを測る。堀り方は、南側は不明であるが、西側は底面から中間部付近まで袋状に掘り込んでおり、上部まで外反する。北と東側は、底面から中間上部付近までフラスコ状に堀込んでおり、上部まで急激に外反する。底面は南側ＤＹ12に切られているため一段低いが北側は平坦である。埋土は８層に確認されている。

ＤＹ13土壙（第56図　第25図版）

調査区の東壁側に確認されたもので、平面形は東側が調査区外であり不明であるが、ほぼ円形を呈するものと推測され約1.9m、深さ80cmを測る。掘り方は、南側以外は底面から中間部付近までフラスコ状に掘り込んでおり、中間部から上部まで外反する。南側は底面から上部付近まででほぼ急激に外反する。底面は平坦である。埋土は５層に確認されている。ＤＹ１とＤＹと重複し、双方に切られる。

ＤＹ14土壙（第58図　第25図版）

調査区の北西壁側に確認されたもので、北側が調査区外であり不明であるが、平面形は円形もしくは楕円形を呈するものと推測される。検出長さ1.2m、深さ90cmを測る。掘り方は、東側が垂直であり、西側が底面から一旦緩やかに立上り、上部に垂直である。底面は平坦である。埋土は５層に確認されている。出土遺物には土器片が若干認められる。

ＴＹ２柱穴（第56図　第25図版）

調査区の南東側のＤＹ３北に確認されたもので、平面形は円形を呈し約70cm、深さ15cmを測る。掘り方はほぼ垂直であり、底面は平坦である。埋土は５層に確認されている。遺物の出土は認められない。

ＴＹ８柱穴（第58図　第25図版）

調査区の北西側にＴＹ８～10柱穴が南北方向に連続して確認されたもので、平面形は楕円形を呈し、80～85cm、深さ16cmを測る。堀り方はほぼ垂直であり、底面は平坦である。埋土は２層に確認されている。遺物の出土は認められない。

ＴＹ９柱穴（第58図　第25図版）

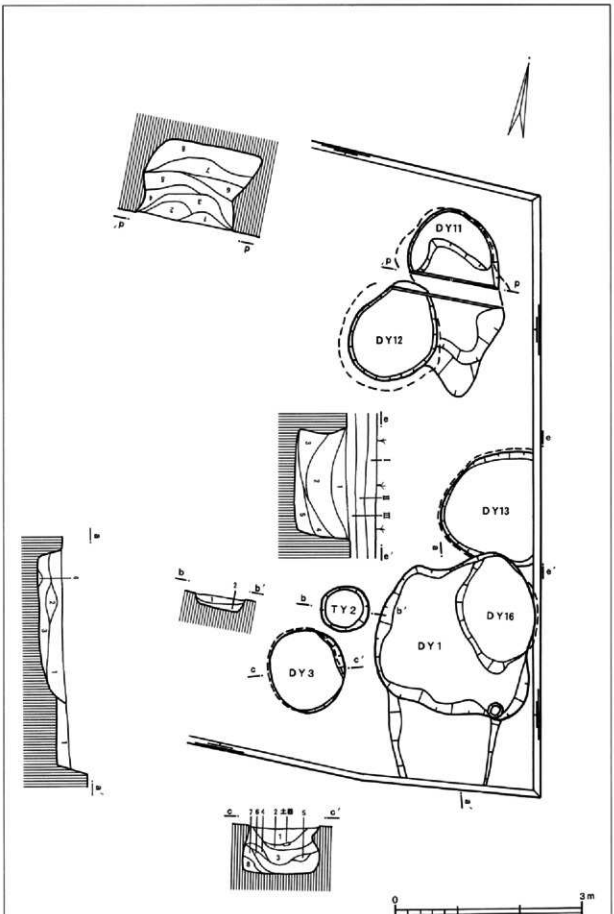
調査区の北西側ＴＹ８と10の間に確認された。平面形は楕円形を呈し55～60cm、深さ12cmを測る。掘り方はほぼ垂直であり、底面は平坦である。埋土は１層である。遺物の出土は認められない。

ＴＹ10柱穴（第58図　第25図版）

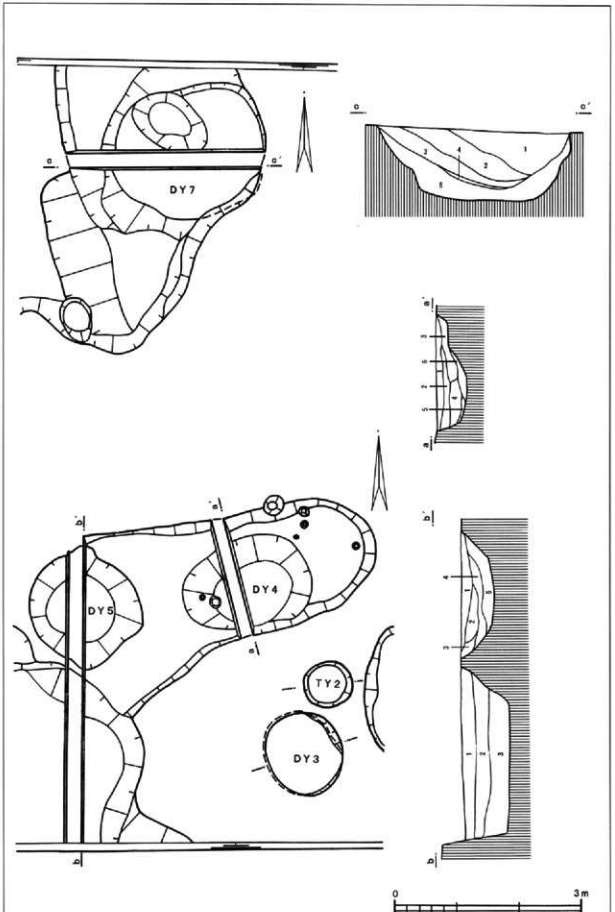
調査区の北西側に確認された。平面形は東西に長い、楕円形を呈し75～95cm、深さ約50cmを測る。掘り方はほぼ垂直であり、底面は平坦である。埋土は３層に確認されている。遺物の出土は認められない。

ＴＹ15柱穴（第58図　第25図版）

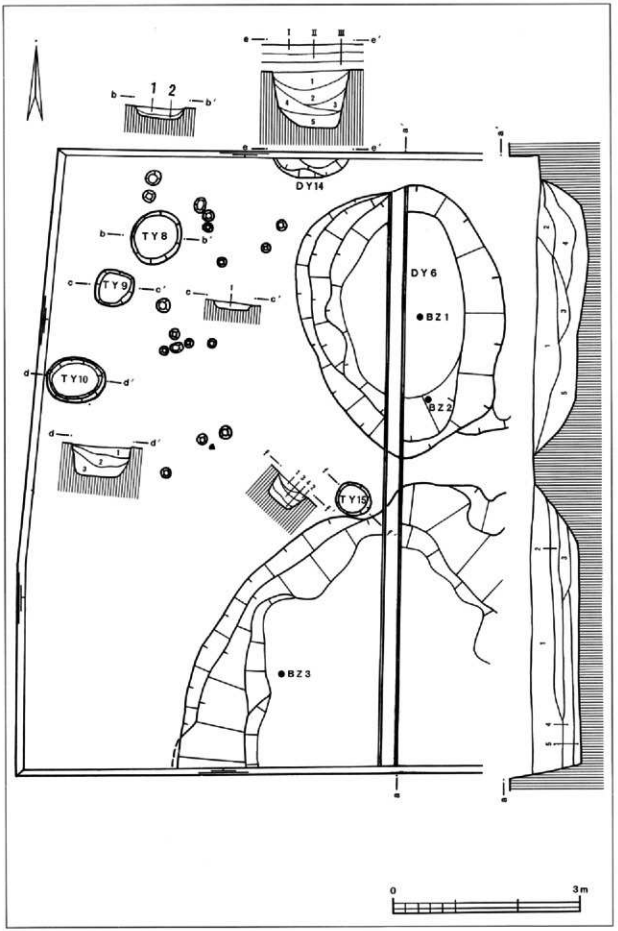
調査区の西側に確認されたもので、平面形は楕円形を呈し50～58cm、深さ36cmを測る。掘り方はほぼ垂直で、底面は平坦である。埋土は４層に確認されており、出土遺物は認められない。



第57図　大塚山遺跡土壌平面図（1）



第58図　大塚山遺跡土壙平面図（2）



第59図　大塚山遺跡土壙平面図（3）

Ⅳ　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は総数で118点ある。大別すると土器片が73点、次いで石器が13点、剥片18点であった。土器片は縄文前期初頭と同中期に大別されるが、大半は縄文前期初頭に位置する土器群である。遺構内の出土遺物は僅かであり、落ち込みの包含層からの出土がほとんどであったため、遺構の正確な年代は不明である。器形としては、深鉢形が中心であり、若干小型土器が含まれる。石器の完形品はごく僅かである。以下、土器、石器の実測図化したものについて簡単に述べる。

(1)　出土土器

Ⅰ群土器〔第59図14～17　第28図版　第29図版〕縄文時代前期初頭に併行する土器群を本群とした。

Ⅰ群ａ　口縁部に一状の半裁竹官と、網目状の撚糸文が施されているおり、大木式併行と推定される。

Ⅰ群ｂ　多状縄文原体を原体として羽状縄文を構成するもので、１～３・６・７がこれに含む。花積下層と併行する。

Ⅰ群ｃ　18は縄文「ハ」状文を施文するもので、口縁部文様帯を構成している。

Ⅰ群ｄ　４・７・８は羽状縄文を転回し、中央部に結束部分を横位に施文した手法で３点出土している。

Ⅱ群土器〔第59図13〕

13は貼文と無文を組み合わせた土器で、胎土に少量の繊維を含む土器群である。

Ⅲ群土器〔第59図19〕

19はキャリパー型をなす小型の口縁部片で、口唇部に「の」字状沈線文を配したもので、口縁部にはＬＲ３本の多条の縄文と、一条の粘土紐を加え、胴部を無文帯で区画しており、大木８ｂ式に求められる。

Ⅳ群土器〔第59図20〕

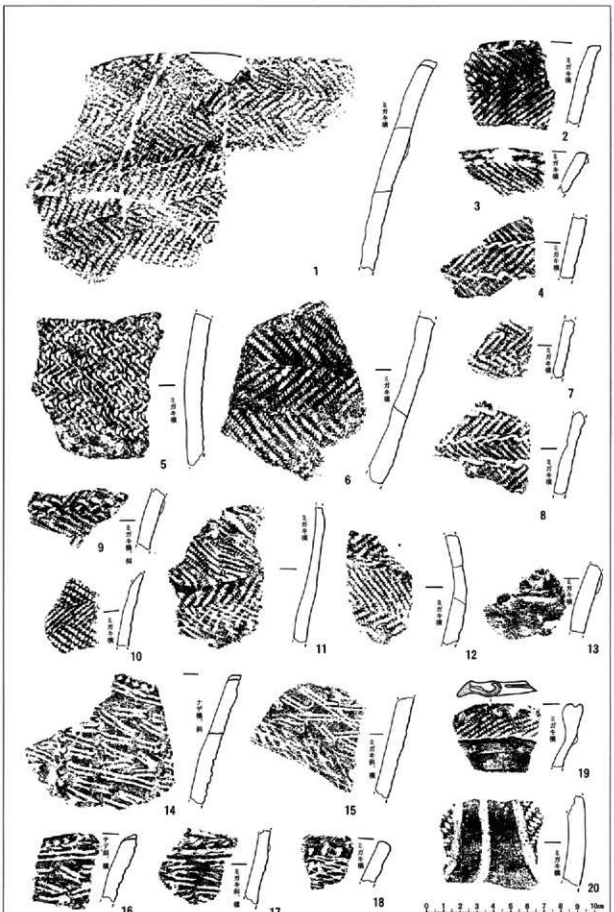
縄文中期の土器である。逆「U」字状文を単位とする磨消縄文であり、大木９ｂ式併行の土器の胴部破片である。

(2)　出土石器

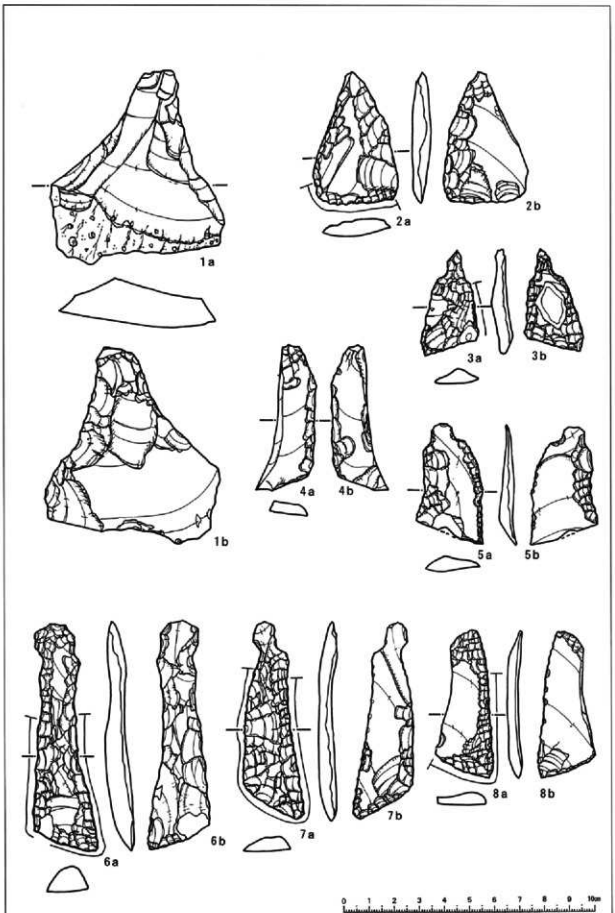
１は三角形を呈する未完成品の打製石斧。２は使用痕が認められ尖頭状の石篦状石器。３～８は縦形を有する石匙群である。これらの形態を有す石匙群は、縄文前期初頭に認められる形態である。６～８の縁辺には使用痕が認められた。４・５はつまび部の整形が明確でないことから未完形石器と考えられる。３には加熱によるハジケ面が認められる。

Ⅴ　まとめ

今回の調査は少範囲であり、住居跡や遺構等からの遺物には恵まれなかったが、本遺跡は縄文前期初頭と同中期を中心としている集落の範囲であることが明らかとなった。最後になりましたが、地権者の高山三郎氏には全面的なご理解と、ご協力を賜り、心から厚くお礼申し上げます。



第60図　大塚山遺跡出土土器拓影図



第61図　大塚山遺跡出土石器実測図

第6節　木和田古墳

Ⅰ　古墳の概要〔第61図参照〕

本市における終末期古墳は、現在確認されているものをあげると6箇所、198基が現存しており、すでに土地利用等によって消滅したのを考慮すると約230基あったと推測される。これらの古墳群は本市の南東部に集中するのが特徴であり、南方から牛森古墳、牛森山古墳群、木和田古墳、長手古墳群、天神裏古墳、戸塚山古墳群と命名されている。

今回、調査を実施した木和田古墳は、米沢市大字木和田字月原に所在するもので、北東から延びる尾根、月原山の先端部、標高252～257mの南斜面に立地する。古墳は、昭和26年（1951）に地主の斎藤文太郎氏がブドウ園造成の際に塚を掘り起こしたところ横穴の石室が現われた。その時にこの周辺にあそびにきていた、当時中学生の平間重光少年がこのことを上郷中学校の先生に報告した。先生は山形大学の故柏倉亮吉氏に連絡し、同年に山形大学を中心としたグループによって簡単な調査を実施している。その時の報告によると、羨道は崩されて不明であったが、玄室は奥行2.3m、幅1.3mほどで、奥壁は凝灰岩の一枚岩を用い、側壁は凝灰岩の割石を積み上げて築かれている。遺物は長さ71.7mの大刀と鉄鏃、土師器片や須恵器の長頸壺が出土した。その後昭和34年に置賜史談会によって調査が実施された。詳細は「置賜の文化財写真集」に報告されている。

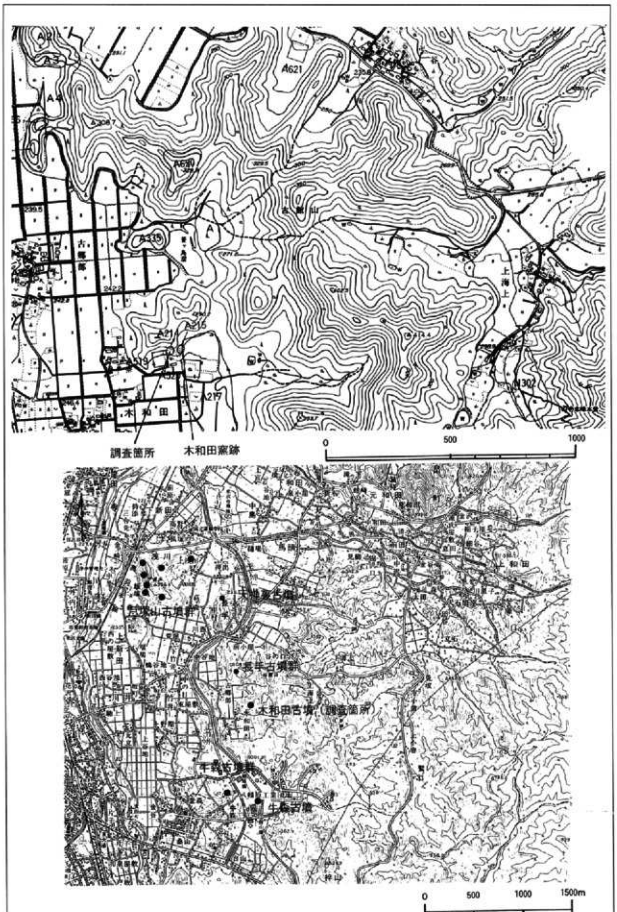
昭和47年（1972）には木和田古墳の東方約30mの地点に木和田窯跡が発見された。その結果古墳から出土した長頸壺がこの窯で焼成された可能性が高いと指摘され、古墳との関連が注目されてきた。木和田窯跡は昭和47年に置賜考古学会によって発掘調査が実施された。窯体は全長が約5m、幅1.2mを有する無段地下式登窯であり、地下式の窯としては県内初の発見となった。年代は8世紀前半期に求められ、県内最古級であることが判明している。

窯跡は、平成7年3月に市の指定を受け、平成9年に保存処理と保存施設を整備している。

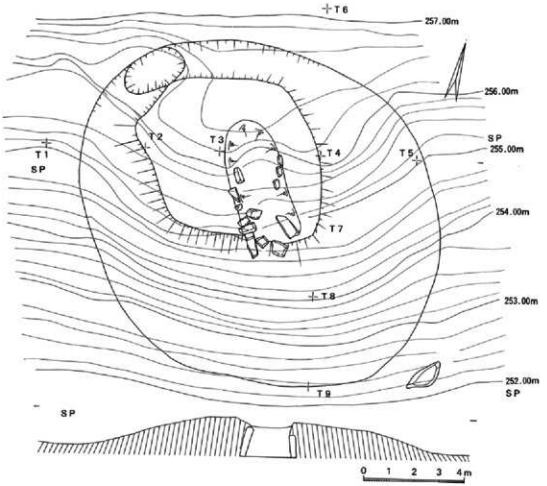
今回の調査は、木和田窯跡の保存整備の終了に伴って、古墳と窯跡の関連性を把握するために実施したものである。ちなみに、横穴式石室を有す古墳を調査するのは、長手2号墳に次いで本市では2例目である。

Ⅱ　調査の経過

東西20m、南北16mの320㎡を調査した。今回の調査は墳丘の測量、墳丘の構築解明、主体部の精査、実測図作成の3点に重点を置き平成9年10月20日～同年11月5日の延べ17日間の日程で調査を開始した。測量はT1～T5を東西に配し、T6～T9を南北にすなわち「＋」字形にトラバを設定して現況の測量を実施した。この作業には2日間を要した。次に主体部の精査に着手した。天井石、羨道箇所が消滅しているので玄室を対象とする。玄室の埋土にはビニールやプラスチックが混入しており、近年になって埋め戻した状況を呈す。想定していたより、埋土の量が多く、底面まで掘り下げるのに4日間を要した。埋土の中には東側の側壁の一部が崩落しており、人力では持ち上げることができずチェーンブロックを使用した。埋土からは人骨片



第62図　木和田古墳位置図



第63図　木和田古墳現況測量図

や土師器片が出土した。10月28日からは第64図で示す様にA～Fの箇所にトレンチを配し、墳丘の下端の確認や版築状況の観察を実施した。この調査には3日間を要した。10月31日にはセクション図作成や写真撮影を行った。これらの調査の結果を11月4日に現地において報道関係者に発表した。その日の午後から調査前の現況に戻すため埋め戻し作業を開始した。この作業に2日間を要した。埋め戻しが終了した11月5日に発掘用具を撤収し今回の調査を終了するに至った。今回の調査期間中は晩秋としてはあたたかい日が多かった。

Ⅲ　古墳の形態〔第62、64図参照〕

古墳は既に、葺石と墳丘の盛土の一部が失われた状況を呈す。トレンチで盛土の状況を確認したので各トレンチを説明し、その後に測量図とトレンチの成果を加味して、古墳の形態を述べたい。

トレンチは埋め戻すことを配慮して、幅は60cmに設定した。A～E、前庭部の拡張箇所Fを加え合計6箇所に配置して、その場の状況に応じ掘り下げた。北方部にトレンチを配置しなかったのは、測量調査の際に表土を調査した結果、この周辺は構築時状況と変容していると認識したからである。Aトレンチは長さ1.7mであり、最深部は20cmである。履土は2枚確認され、墳丘上部の土が流出した状況を呈す。トレンチ内で実線で示したのが本来の下端の位置である。なお、いずれのトレンチにも周溝は認められなかった。

Bトレンチは長さが4.1mある。最深部で30cmを測り、流出した土砂がA地点よりも多い。

Cトレンチは最も長く8.3mを測る。トレンチ南東部にある大形の石は天井石に使用されていた形状を呈す。現況の下場よりも延びる様相を呈す。

Dトレンチの長さは3.8mである。前述したB、Cに見られる様に、現況の下場よりも延長して確認された。最後のEトレンチは、ほぼ東西に6m、深さは20～90mを測る。東方端には側壁の裏ごめ石が確認された。使用された石は大型の石を整形した際にできる石クズ片である。セクション図で示したように墳丘の基本層は6枚で、南斜面の土砂を削り取って整形した後に石室を設置し、版築を行った状況を呈す。Fトレンチは前庭部の様相を把握するために東西3.4m、南北2mの範囲を設定し精査したが目的を達成するには至らなかった。削平されてしまったためと考えられる。

以上の成果からまとめると墳丘の規模は東西12.9m、南北15.8mの長円形を呈す山寄式の円墳である。墳丘の高さは現況で1.1mであるが、葺石と土盛を換算すれば約3.5m前後と思われる。周溝は伴わないが、北西部に楕円形状の落ちこみ箇所がある。

Ⅳ　主体部の形状〔第63図参照〕

終末期古墳の特徴である玄室と羨道を伴った典型的な横穴式石室の形態を示す。玄室・玄門の残存は良好であるが、天井石・羨道（一部残存）、羨門が消滅しいる。墳丘の規模からこれらの消滅した箇所を推測すると、羨道は真北に対して南東へ41度傾斜した位置で、長さは約2.5m、それに前庭部が構築されていたと推測される。ちなみに西南斜面には古墳に使用されていた石